
ネガティブな恋

ヒロヒト.JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネガティブな恋

【Nコード】

N0224C

【作者名】

ヒロヒト・JJ

【あらすじ】

雄介と恵美は両思いながらも、純粋で内気同士がゆえに、一度芽生えかけた幸せも同僚の福永の思惑どうりに仲を引き裂かれてゆく。その協力者には恵美の妹・知美もいた。やがて恵美を我が物にしようとする福永と、雄介に好意を抱く知美の組み換えカップルが成立するが、恵美を忘れ切れない雄介、そして恵美との性格の不一致を痛感する福永にも限界が訪れていた。一方、過去の事故のトラウマから抜け出せないでもがいている恵美の苦悩。更に過去の事件も含め、明らかになる新事実と真相。恵美と雄介に永遠の未来はあるの

か？

第1話～5話（前書き）

第1話〜5話

第1話

きっかけ

雄介はいつも仕事帰りに降りる駅を乗り越した。でもそれは居眠りしていたのでもなく、考え事をしてるうちに通り越したわけでもなかった。

原因は・・・そう、あの彼女だった。

雄介の帰りの電車にはいつも彼女が乗っていた。そして雄介が降りたあとでも彼女はそのまま電車と共に去って行った。

そんな状態が3ヶ月ほど続いていた中、雄介はついに意を決し、彼女のこともっと詳しく知りたい一心で、最後まで跡をつけてみることにしたのだった。なかばストーカー的な行為に雄介自身の心の葛藤もあったが、好奇心と彼女への憧れの気持ちが勝っていたのである。

いわゆる一目ぼれ。。。でもそれにはきっかけがあった。

第2話

尾行

彼女は雄介の降りる1つ先の駅で電車から降りた。

雄介は気づかれないように、別な扉から外へ出て、彼女の跡を追った。

こんなことをして後ろめたい気持ちもあるが、好奇心を抑えきれず

にはいられなかった。

最初は同じ方向へ帰り道を急ぐサラリーマンたちも数人いたが、歩いて5分ほどたつ2人減り、3人減り、ついに彼女ひとりだけが細い路地を歩いていた。閑静な住宅街を過ぎ、アパートの密集地域にやってきた。

雄介はある程度、距離をおいて歩いてはいたが、彼女が何かの拍子で振り向けば、目に付かないはずはないので、極度の緊張状態になっていた。

あたりはもう薄暗くなっていた。彼女は車のメイン通りからわき道にそれて、50mくらい歩いたところにある2階建てのアパートの階段を上って行った。

「ほほう。。。ここなんだ。。ひとり暮らしかもしれないな。。」

雄介は心持ち安堵した。もしも彼女の行き着く先が大豪邸で、そのお嬢様だったらどうしよう。。。あるいは、誰か他の男と待ち合わせの約束でもしていたら。。。でも良かった。庶民的な家に住んでいるようだ。

雄介は自分勝手な判断で、彼女に親近感を覚えていた。

アパートの2階の一室に明かりがついた。

なぜか言いようもないほどの満足感に満ちた雄介は、一気に緊張もほぐれ、自分の自宅へ帰る決意をした。

「こんなことで嬉しいなんて。。俺も小っちゃいな。あー腹減った。。」

帰り道の途中にコンビニがあった。小腹のすいていた雄介は店内に入り、食べ物を買った。

「なんだよ。明太子マヨネーズがないじゃんか。。」

これは雄介の大好きなおにぎりであった。多少はがっかりしたもの

の、

カルビ焼肉があつたので、それほど落胆せずに買い物を終えた。

そして自動ドアを出ようとしたとき、まさにそのとき、偶然にも「あの彼女」と鉢合わせになった。雄介の鼓動が大きくドクンと波打った。

「あ。。。」

「あ。。。」お互い同じセリフ。

「ど、どうも。。。おひさしぶりです。。。」と雄介。

「は、はい。以前はほんとにすみませんでした。ご自宅はこのお近くなんですか？」

「え？あ。。。はい。そうなんですよ。」

「ではいつも同じ駅で降りてたんですね私たち。」彼女は少し微笑みながらそう言った。

「そうだったんですね。人が多いから全然気づきませんでした。」

「うふ。じゃ今度から駅で気づいたら挨拶しますね。」

「は、はいっ！！じ、じゃこれで失礼します。」

雄介はコンビニを飛び出るとなぜか一目散に全力疾走で駅まで走った。

このような些細な会話でも、彼女と話せたことが嬉しくて嬉しくて、走らずにはいられなかったのである。

「やったああああああゝ！！！」

その後、雄介がとった行動は、朝の出勤時に自転車となり前の駅前まで行き、通勤時間の彼女を見つけてホームで挨拶をしながら職場へ向う変則的な日々を送るのだった。

第3話

気になる人

「ただいま。。」恵美はアパートの玄関に着くと一息ため息をついてつぶやいた。

「おかえり、お姉ちゃん。どうしたの？体調悪い？」

「ううん。別に。。」

「お姉ちゃん、隠し事はダメだよ。悩んでたっていいことないから、何でもあたしには言ってよね。すっきりするよ。」

「うん。ありがとう知美。ちよつとね。。」

「ほらほら、そのちよつとが考え込む原因を作るのよ。また鬱になっちゃうよ！」

「人のことそんな簡単に鬱って言わないで！！」恵美の態度は急変した。

「あ。。。ごめんね。。。お姉ちゃん。あたしつい。。」

知美は姉を監視し、見守る役目で実家から離れて同居していた。

姉の恵美もそのことはうすうす気づいてはいたが、自分も実家から出て生活する決心をしたとき、ひとりで暮らすのは正直自信がなかった。しかし、そうするしか方法がなかった。もう実家には。。いや、この町にはいられなかった。だから知美と一緒に暮らしてくれろのを聞いたとき、心底嬉しくて安心もした。

「お姉ちゃん、ホントにごめん。でもお姉ちゃんにはいつも元気でいてほしいの。今までいっぱい苦しんだからこれからはもっと元気になってほしのよ。」

「うん。。わかってる。。でももう少し時間がかかるわ。。」

「急がなくていいよ。でも最近なんかあったの？おせっかいかもしれないけど、お姉ちゃん、ため息の回数が多くなったように思う。。」

いつもつい一言多くなってしまいう知美だったが、姉に対する思いは人一倍強かった。

「あのね。。知美。最近ちょっと気になる人がいるんだけど。。」

「Σ（・◇・＊エエッ!??それってまた変態ってこと?怪しい人?」

「ううん。そうじゃなくて、好感持てる人ってことよ。」

「あゝびっくりした。。。いい人ってことね。」

「ええ、悪い人には思えないけど。。毎日駅のホームで会うのよ。」
「駅員さん?」

「いいえ、同じ電車で出勤するサラリーマンだと思うわ。」

「へえ、お姉ちゃんナンパされたってこと?」

「違うわよ。最初はあたしがその人に失礼をしたのが始まりで。。その後しばらくたってから、偶然そのコンビニで鉢合わせしてから毎日駅で会うようになったの。」

「じゃその人もこのへんに住んでるのね?」

「聞いてないけど、多分そうだと思うわ。」

「でもちよつと変。。なんでコンビニで会ってから駅でも会うようになったの?もつと前から駅でわかってもおかしくないの?」

「あたしが前しか見てないからだと思うわ。他に關心なんてないから。知ってる人に偶然会うのも怖いし。今はまだ。。誰とも知り合いいには会いたくないの。」

「でもそんなお姉ちゃんが気になる男の人ってあたしも気になるなあ。。ね?どんな人?かっこいい?」

「ごく普通の人よ。でも優しくてすぐくさわかそう。」

「（!o!）オオ!（!o!）オオ!いいじゃんいいじゃん!お姉ちゃんに春が来そうね。」

「まだそんな段階じゃないわよw知美ったらもう。」

「あたしも早く彼氏作ろつと。」

「知美は彼氏より先に大学受験があるでしょ！勉強しなさい。」
「彼と一緒に勉強すればもっとはかどるわよ。」
「ものは言いようねw」

2階のアパートの一室で、こんな姉妹の会話が流れているさなか、外では雄介が灯りのついた窓を眺めていた。

「よし！明日彼女に言おう。俺と付き合ってくれるだろうか。。。」「

こうして雄介はまた駅の駐輪場から自分の自転車に乗り、帰途につくのだった。

第4話

悪しき同僚

「雄介、今夜飲みに行かねえか？」

職場での昼休み。家も近所で同僚の福永良太が声をかけてきた。

「あー。。。えと。。。今日はちよつと。。。」「

「なんだよ、付き合いわりいな。もう何回断ってんだよ。お前飲めるやつじゃん。体調でも悪いのか？」

「いや別に。。。あ、ちよ、ちよつと疲れ気味かな。」「

「だから飲んで気分転換しようってんじゃない！あんなあ、雄介。俺だからお前を誘ってるんだぜ？他の連中だったら2回も3回も断られたら、もう2度と話しかけねえぞ！」「

「うん。。。それはわかるけど。。。」「

「全く煮え切らない奴だな。お前オタクだったのか？家に帰って着せ替え人形の世話でもしてんのかよ？」「

さすがの温厚な雄介も今の良太の発言にはムツとなった。

「あんなあ、人には誰にも言えない事情があんだよ！何でもかんでも人に言えたらこの世に悩みなんてねえんだよ！！」

「雄介お前、今悩んでるのか？」

「悪いけど今はノーコメントとしか言えない。」

「わかったよ。もう聞かない。何か事情があることさえわかれば納得したさ。じゃな。」

と言って、良太は自分のデスクに戻っていった。

午後からの雄介は仕事にならなかった。頭の中で今夜どう告白するか、自問自答しながら、あーでもないこーでもないと繰り返し思いを巡らせていた。

『ストレートに言って断られたらどうしよう。。じゃそのときは友達でいいからお願いします！。って言おうか。。それとも最初でのうちに、友達からお願いします！。って言った方がいいのか。。いやダメだそんなんじゃ。きつと後悔する。あ、しまった！そういうえば彼女に彼氏がいるかどうかはまだ知らないのにこんなこと言っているのか。。ヤバイ、全然確認してなかった。。』

雄介がデスクでぼーっと考えごとをしているのに気づいた良太は、けっこうカンが鋭い人間であった。

「ははあ。。雄介のやつ。。女だな。。よし、帰りに跡をつけてみるとするか。」

雄介と違い、良太はマイカー通勤だったので、自宅が近所であっても二人は、出勤時や退社時に一緒の道を帰ることはなかったが、この日良太はマイカーを会社の駐車場に停めたまま、気づかれないように雄介から間隔をあけて、電車に乗り込んだ。

雄介はいつも彼女が乗り込んで来る車両を熟知していた。以前からそれは知っていたが、その時は近寄れなかった。でも最近、例のコンビニで彼女と偶然鉢合わせになって以来、車両の入り口付近に立って挨拶をすることができるようになっていた。

そして今日もその瞬間が来た。良太が遠くから見ているとも知らずに。

「こんばんわ。お疲れさま高瀬（↑恵美のこと）さん。」

「こんばんわ。お疲れ様です。田口（↑雄介のこと）さん。」

二人はお互い苗字を交せる程度にはなっていた。

「田口さんていつもまっすぐ帰宅されるんですね。寄り道とか、飲んで帰ったりしないんですか？」

「ああ、僕はあんまり酒は特別好きというわけじゃないんですよ。」

『うそつけ！酒飲むと態度でかくなるじゃねえか雄介め！』

良太は帰宅ラッシュの満員電車のかげから耳を大きくして聞いていた。

「しかし予想は凶星だったな。雄介のやつやっぱり。。しかもすげえ可愛いじゃんか。。雄介にはもったいない。。どうやらまだ深く付き合っていないようだし。。俺にもチャンスあり。。だな。（ー
）フッフ」

自宅の駅に近づいたのに、雄介が降りる気配すらないので、良太の好奇心は益々膨らみ、彼もまた行動を共にするのだった。

いつものように、恵美の降りる駅で一緒に雄介も降り、そのあとを良太も追った。

改札口を出たところで、恵美と雄介は立ち止まってお互い今日のお別れを言うのが恒例になっていた。

「それじゃさよなら。田口さん。」

「あ、高瀬さんちよつと。」

「え？はい？」

「あの。。。えと。。。高瀬さんは彼氏とかいるんですか？」

「。。。いえ。。。今は。。。誰も。。。」

雄介の鼓動の高鳴りは最高潮に達した。そして自分に言い聞かせた。

『ここでかんだらいかん。絶対いかん！しっかり自分の気持ちを言わないと。』

一方、良太は改札口付近の柱のかげから様子を伺っていた。

「高瀬さん。もし僕で良かったら。。。お付き合いしてもらえませんか？」

「。。。。。。」

彼女の反応の遅さに雄介は心臓が飛び出そうになっていた。

『この瞬間の時間は長い！長すぎる！！』

そして恵美はようやく重たい口を開いた。

「すみません。。。そのことはもう少し考えさせて下さい。。。」

「え。。。？」

「あ、いえその、田口さんがイヤっていうんじゃない。あたしの気持ちはまだ不安定なんです。」

「はあ。。。」

こう彼女に言われては、雄介はどう言葉を返したらいいのか全くわからなかった。緊張とショックで頭の中も真っ白だ。

「でもあたしの気持ち不安定なのは、田口さんのせいではないんです。いろいろあって。。ごめんなさい。お気持ちとっても嬉しいです。でもあと少し時間を下さい。じゃさようなら。。。」

そう言うとき恵美は足早にその場から去って行った。

「。。これって、フラれたわけじゃないかな？ うん、確かに彼女は嬉しいって言った！ きっと何か事情があるに違いない。相談にのってあげたらいいかもしれないな。。。」

今日の結果は出なかったが、雄介はある程度の自信を得た。

そして彼女の言ってくれた『嬉しいです。』の言葉を頭の中で何度もリピートしながら、彼も足早に自転車で帰途に急いで行った。

ひとりその場に残って考えていた福永良太。

「（＊、ー、＊）フフ。。雄介め。わざわざ自転車をとなりの駅まで置きやがって。。しかしあの彼女。。本当に可愛いぜ。。絶対俺のものにしてやるさ！（☆▽☆） キッラーン！」

不敵な笑みを浮かべながら良太も駅を後にした。

第5話

小悪魔の陰謀

恵美は自宅で深いため息をついていた。このため息がいつものものとは違うことを妹の知美は見逃さなかった。

「お姉ちゃん、何かあったの？職場のこと？それとも例の気になる男の人のこと？」

「うん。。あのね知美。。告白されちゃった。」

「Σ（・◇・＊エツ！？やったじゃないお姉ちゃん。これで片思いじゃないことがわかったし、悩む必要ないじゃないの。」

「そうなんだけどね。。でも田口さんのことよく知らないもの。。」

「（・ゝ・） ふうん。田口さんって言うんだ。最初から何でも知ってるわけないでしょ。付き合ってみて初めてわかるもんじゃない？」

「そんなこと理屈ではわかってるんだけど。」

姉が煮え切らない理由を知美はもちろん知ってはいたが、それではいつまでたっても先に進まない。姉の病んだ精神は何かきっかけがなければならないと知美は考えていた。

「お姉ちゃんの不安な気持ちはよくわかるわ。じゃ明日お姉ちゃんの出勤のときあたしも一緒について行ってあげる。」

「なんで知美が？」

「こう見えてもあたしって結構男の見る目あるのよ。その田口さんて人を査定してあげるわよ。」

「外見だけじゃわかるはずないでしょ。」

「そりゃそうだけど、ある程度は表情の豊かさとか、話し方の物腰とかで判断できるものよ。」

「へえ。。知美、占い師にでもなったら？」

「ちよつとはそれも頭にあるんだけどねwま、あたしの予備校も明日は午後からってこともあるしね。」

「それが理由？彼を見たくてしょうがないからじゃないの？」

「う！凶星w」

恵美は妹の知美を頼もしいと思っていた。自分と違って気が強いし、物事をはっきり言えるタイプだからだ。

『姉と妹が逆転してくれたら良かったのに。。』恵美はいつもそう思っていた。

翌日の朝、いつものように駅のホームで雄介と恵美は挨拶を交わした。

「高瀬さん、おはようございます。昨日は突然びっくりさせてすみませんでした。」

「いえ、私こそ田口さんが気を悪くしたのではないかと。。」

「そ、そんなこと全然ないです。あの。。返事はゆっくりでいいですから。こうしてあなたと普通に会話するだけでも僕は嬉しいんです。」

恵美は真っ赤になって、雄介と目を合わせることができなくなっただ。

そのとき、その場から少し距離をおいてついて来ていた知美が二人の間に立った。

「はい、お姉ちゃん。家に携帯忘れてたよ。」

「あ。。ほんとだ、ないわ。。ありがとう知美。」

「お姉ちゃん、そそっかしいから気をつけてよね。」

しかし事実とは違っていた。恵美が携帯を忘れたのではなく、まだ家を出る前に、知美が恵美のバッグから携帯を抜き取ったのであつ

た。

それは雄介と恵美の間を割って、話すきっかけを作る口実であった。

「はじめまして。妹の高瀬知美と言います。いつも田口さんのことは姉から聞いてます。」

「は、はあ。」

「知美！ 恥ずかしいからそんなこと言わないで！」

「あ、ごめんお姉ちゃん。でも田口さんて、すごくいい人そう。」

「あはは。。なんかそんなこと言われると僕の方が恥ずかしいですよ。」

「お姉ちゃん、今度うちに遊びに来てもらったら？ あたしもいるんだし、安全よw」

「もう。。知美ったら。。」

そのとき恵美は思った。『知美はどうしてここまでおせっかいなんでしょう？ 心配してくれるのは嬉しいんだけど。。話が急に進みすぎる。。あたしがモタモタしすぎてるのかしら？ 知美があたしを立ち直らせるために、きっかけを作ってくれてるのかしら？』

しかし、恵美の予想は違っていた。

知美はなんと、雄介を見たその瞬間、彼に好意を抱いてしまった。

以前から恵美に、雄介のことを色々聞かされて、知美のイメージの中で彼に対する創造がどんどん膨らんでいった。

するとそのうちに、このまま姉がいつまでも煮え切らないのなら、自分が彼と付き合ってしまったおうと思いはじめていたのである。

決して姉に敵意などない知美でだったが、今現在、恋に飢えている自分を隠せなかった。そして、抱いていたイメージと、雄介が合

致してしまったのである。

さらに、知美には小悪魔的要素があった。

姉の恋を応援はしているものの、それが徐々に自分に取って代わるためにはどうしたらいいのか、考えはじめていた。

その駅での光景をそばから見ている福永良太がいた。

「妹か。。利用できるな。。よし！」

恵美と雄介は予想もしない渦に巻き込まれてゆく。。。。

(続く。。。)

第6話〜8話

第6話

恵美の過去

それから数週間が経ち、まだ正式に付き合っている雄介と恵美ではなかったが、お互いを下の名前で呼ぶようにはなっていた。

雄介もいまいち度胸のある性格ではないので、デートに誘うタイミングも逃し、今だに駅と通勤電車の中だけの付き合いだった。

そんな朝の出勤時、恵美と駅で別れた雄介は職場に向って歩いていた。

「田口さん田口さん。」

「σ（・|・）ン？」 雄介が振り返るとそこには知美がいた。

「あ。。君は恵美さんの妹の。。知美ちゃんだっけ？」

「はいっ！当たり前w ごめんなさい。あとをについて来ちゃって。」

「何か僕に用事でも？」

雄介はふと思った。

『ひょっとしたらこの妹は、恵美さんの伝言でも聞いてきたのかもしれないな。。よし！うまくいけば。。』

「あ。。です。ね。姉のことなんですけど。」

『ほらきた！』 雄介の鼓動が高鳴った。

「田口さん、姉とまだデートもしてないんでしょ？」

「うん。。そうなんだ。でもそれは僕の勇気がないからさ。情けない話だよ。」

「ううん。そうじゃなくて。。実は姉の方こそもう、男性と付き合い勇気がなくなっているんです。」

「Σ(・◇・＊エッ!？そ、それはどうして？大失恋でもしたのかな？」

「そういうことになるかもしれないけど、もっと最悪の事態になって、シヨックから姉は立ち直れないでいるんです。」

「。。。僕がその理由を聞いてもいいのかい？」

「はい。だってもうこんなに長い間、電車だけの付き合いなんて、妹として田口さんに申し訳なくて。」

「なにも君が気にしなくてもいいんだよ。」

「いえ、気にします。姉が男性と付き合いえない事情を知っていながら見て見ぬふりをしてたんですもの。」

「。。。。」

「姉は。。。姉は。。。人を殺したんです。」

「。。。。。。えっ!？。。。。。。。」

「姉には以前、付き合ってる人がいました。普段はすごく優しい人だったんですけど、お酒が入るとわけがわからないほど酒乱になって。。。」

「。。。。。。」

「姉は毎回暴力に悩まされていました。激しくののしられたり、命令に従わないと物も飛んで来たり、ちょっと気に入らないことがあったら怒鳴りまくられていました。」

雄介はふと気が付いた。

『そうか。。。それでだったのか。電車で彼女の口紅が俺のシャツについたとき、あんなに泣きそうな顔で必死に謝ってたのは。。。怒られることへの恐怖。暴力への恐怖。』

「随分ひどい目にあっただんですね。恵美さん。。。」

「ええ。それである運命の日、その男は酒に酔って包丁を持ち出し

ました。『俺に逆らうとどんな目にあうか教えてやる!』って姉を羽交い絞めにして首に包丁をつきつけました。」

「。。。。。」

「あまりの恐怖に姉は大声を出して、それにびっくりした男は手にしていた包丁を落として後ずさりしました。『このアマーふざけやがってえ!』男は再び姉に飛びかかって行きました。その瞬間、男の動きが止まって。。。。男の胸には包丁が突き刺さっていました。」

「。。。。でも。。。。でもそれは恵美さんが悪いわけじゃない。」

「ええ。ですから姉は正当防衛が成立して逮捕はされなかったんです。」

「当然ですよ。」

「でも。。。。それ以来姉は男の人と付き合えなくなっただけです。田口さん、姉のことはもう諦めてくれませんか? このままではいつまでたっても歯がゆい思いをするだけです?」

「僕の手で助けてあげることが不可能なのかな?」

「だって。。。。姉はいろいろプロの方にカウンセリングしてもらってるのに、全然効果なかったんですよ。」

「しかし。。。。。」

ついにしびれを切らした知美は衝動的な行動に出た。

「田口さんっ! 姉なんかじゃなくてあたしと付き合っ! 恵美は自分が人殺しであることから逃れられないの! 精神的にも治らない! あたしがいなきゃダメなの。でもあたしは。。。。あたしは田口さんがいなきゃダメなのっ!」

「。。。。知美ちゃん。。。。。」

第7話

告白

突然の知美の告白に戸惑いを隠しきれずにいた雄介は、その場を凌ぐのに必死だった。

「知美ちゃんごめん。。もう出勤時間ギリギリだからこの話はまたあらためてじっくり話そう。」

雄介は知美に次のセリフを言われる前に急いでその場を去るしかなかった。

そうか。。俺が恵美さんを何とかしてあげないと。。

彼女の心は恐怖でいっぱいだ。俺が優しく包んであげよう。

雄介の頭にはそれしかなかった。

仕事が終わり、雄介は意を決して帰りの電車に乗り込んだ。

そして恵美もいつものように雄介の待つ電車の扉へやって来た。

「お疲れさま、恵美さん。」

「お疲れさま。雄介さん。」

毎度ながら恵美はいつも挨拶するときに顔を下向き加減にして、はにかむ。

雄介にはそれが可愛くてたまらなかった。

二人一緒に下車した駅で、雄介は切り出した。

「恵美さん。僕はあなたの不安を取り除いてあげたいと思っています。」

「え。。。。?」

「僕は決して暴力なんてしない。恵美さんと毎日楽しくゆったりとした時間の中で時を過ごしたいんですよ。」

。。。。。」恵美の顔がこわばった。

「あの。。すいません。事情は知美ちゃんから聞きました。過去の嫌な出来事まで。」

恵美は衝撃的なショックを受けた。

「知美が言ったの？本当にそんなこと言ったの？絶対人に知られたくないあたしの秘密を。」

「はい。。でも怒らないであげて下さい。知美ちゃんはお姉さん思いの優しい子ですから。」

「あたし。。あたし。。せっかく誰にも知られない別の街に来たのに。。なんで。。なんでなのよおおう！」

恵美は人目もはばからず、いきなり号泣し出した。

雄介は駅で突然泣き出した恵美を、慌てて肩を抱きかかえながらその場をあとにして、近くの公園のベンチに座らせた。

「恵美さん、ごめん。僕が聞くべきことじゃなかったかもしれないけど、僕にできることなら何でもするから。」

「。。。。。」

「恵美さんが悪いんじゃない！自分を責めるのはもうやめよう。これからは過去を忘れて楽しい日々を送るんだよ。僕の恵美さんに対する気持ちはこれっぽっちも変わってないんだよ。」

「。。。。。」

「気持ちはいじゅうぶんわかるよ。恵美さん。」

今の雄介の言葉に恵美はベンチから立ち上がってキレた。

「何がわかるっていうの！！？そんな簡単に言わないで！！あたしが人を殺したのには変わらないのよ！人ひとりの命をこの世から消したの！」

「でもそれは正当防衛です。」

「法律上はそうよ。でも。でも。世間はそうは見えてくれない。職場にもいられないし、近所からも白い目で見られるし。」

「。。。。」雄介は返答できずにいた。

「あの瞬間の光景が目には焼きついて離れないの！どうしても離れないの！必ず浮かんでくるの！一生忘れることなんか無理なのよ！雄介さんは人ごとだから簡単に言えるの！正当防衛だからって殺人は殺人！絶対にあたしからは消えない出来事なのよ！この傷は一生背負っていかなくてはならないの。嫌な過去は忘れてだなんて、できるものならしたいわよ！でも実際はそんな口先で言うほど容易いものじゃないわ。あたしがどんな気持ちで引越して来たと思ってるの？あなたにあたしの気持ちや本当にわかるって言えるの！！？」

恵美は半泣き状態で一気にしゃべった。

雄介は頭をかなづちで殴られたような衝撃が走った。

『俺は甘かった。。。表向きの体裁だけで恵美さんをなぐさめていただけだった。俺は彼女の気持ちをわかりもしないで思い出したくもない彼女の過去をほじくり出してしまったんだ。俺は馬鹿だ。本当に馬鹿だ。』

「ごめん。。恵美さん。僕が軽率だったよ。返す言葉もないよ。」

恵美はさっきの自分の猛烈な発言で、一気に力が抜けたようにベンチに座りこんだ。

「でもね、恵美さん。僕はあなたを助けたい。いや、助けてあげることができないかもしれないけど、あなたの気持ちが少しでも楽になれるような努力をしていきたい。僕は恵美さんの口から今、過去の忌まわしい出来事を聞きました。それでも僕の恵美さんに対する気持ちには、一片の揺るぎがないのも事実です。これだけはわかって下さい。」

「。。。はい。。。」

「さあ、家まで送りましょう。」

雄介は落ち着きの取り戻した恵美と、無言のままでゆっくりと歩
きながら彼女をアパート前まで送り届けた。

その光景をアパートのカーテン越しに見ている知美がいた。
そしてまた、アパート近くの影からもそれを見ている良太がいた。

第8話

知美と良太

「ちよつとすいませんが、君は高瀬恵美さんの妹さんだよね？」
「え？は、はい。そうですが。」と少しびっくりした様子の知
美。

福永良太は予備校から帰宅途中の知美に声をかけたのだった。

「突然びっくりさせてすいません。僕は田口雄介の知り合いの者
です。彼は知ってますよね？」

「はい。それは。」

「で、彼が君のお姉さんが好きなのも当然知ってるわけでしょ？」

「。。。。。」

「いや、警戒しなくていいですよ。僕は別に探偵ってわけじゃな
いんだから。」

「はあ。。。」

「でも君は雄介とお姉さんが付き合うのには反対だと思っている。

」

「どうしてそんなこと言うんですか？あたしは姉の恋を応援して
います。そんなことを他人に言われる筋合いはありませんが？」

良太は深いため息をついた。

「あのねえ、僕は遠まわしの言い方が嫌いだから、ぶっちゃけ言うけど、君も雄介が好きだよな？」

「へ（ω、——）へぎくッ！。。。」

「隠さなくていいよ。見てればわかるから。」

「そんなこと。。あなたはどこで見ていたんですか？」

「僕も電車での通勤社員でしてね。悪いがこの間、君と雄介の会話を聞いてしまったんですよ。」

「勝手に人の会話を盗み聞きするなんて。。。」

「それについては申し訳ない。本当に悪いと思ってます。でもね、それにもちゃんとした理由があるんですよ。」

「ウソよ。あなたストーカーね！警察呼ぶわよ。」

「ちよっちよっちょ。。慌てない慌てない。俺をストーカーって言うんだったら雄介はもっとひどい奴じゃないか！」

「。。。え？どういうこと？意味がわからないわ。」

「雄介はずっとあなたのお姉さんの跡をつけて家を調べていたんですよ。」

「Σ（・◇・＊エエッ！？そんな。。信じられない！」

「それは君の勝手だけどね。実際に雄介の家はいつも降りる駅のひとつ手前なんですよ。このことは知ってた？」

「Σ—11（▽、；）——1。。。」

「やっぱり知らなかったようだね。彼はお姉さんと毎日接触したのがためにわざわざ自転車での駅までとなり町から来るのさ。」

「。。。。。」

「それなのに俺をストーカー呼ばわりするなんて。本当のストーカーは一体どっちだと思うんだ？え？妹さんよ。」

知美は震え出した。

「あゝごめんごめん。脅かすつもりはなかったんだ。別に怖がらないでいいんだ。俺は君とタッグを組もうと思って話かけたのさ。」

「え。。。？タッグって？」

「率直に言うと、実は僕も君のお姉さんに一目ぼれしたんだ。雄介なんかと彼女をつき合わせたくない。」

「。。。つまり。。。？」

「つまり、君も雄介が好きなら、お互い協力して、あのふたりが付き合わないようにするのさ。それが君にとっても僕にとっても都合だと思わないかい？」

「そ、そりゆあ。。。」

「それとも今の話を聞いて雄介を軽蔑したかい？」

「いえ。。そんなことは。。それが本当なら逆に、雄介さんはよっぽど姉が心から好きなんだなあって。。思うわ。」

「じゃ君はそれで諦めるのかい？」

「いやよそんなの。。。雄介さんの思いをあたしに向けさせたいわ。」

「だろー。このままじゃ悔しいだろが。」

「ええ。悔しいし、せつないわ。」

「だからこうして僕たちが組めば、君と雄介、俺と彼女がペアになって丸くおさまるのさ。わかるね？」

「うん。。あたし。。。どうすればいい？」

「お、乗り気になってきたね。じゃまずね、僕を君のお姉さんに紹介するんだ。そうしたらまず僕は彼女と普通に話し始める。そのうち会話の自然な流れの中で、僕は雄介のストーカー行為をつい口走ったように言う。」

「うん。。（ゴクツ）」

知美は生唾を飲み込んで真剣に良太の話を聞いていた。

「これで雄介は嫌われたも同然だろ。なんせストーカーなんだから。君のお姉さんもわけありで心を痛めてるようだし、少しシヨツクを与えるのは気の毒だが、そこは僕の話術で何とかカバーするさ。」

」

「それであたしの役目は姉にあなたを会わせるだけ？」

「いや違う。君の役目はそれからが大事だ。お姉さんにフラれたショックで落ち込んだ雄介を、親身になってめんどろ見てやるんだ。自分の気持ちを前面に出してね。そのうち必ず君に情がうつるに違いない。」

「うまくいくかしら。。。？」

「いやならこのまま黙って静観してるかい？」

「。。。。。。いえ。。。。。。。するわ！あたし、行動する！！」

「よし決まった。じゃ詳しい打ち合わせはあとで。メルアド交換しよう。」

一方、何も知らない恵美と雄介は、今日も微笑ましく挨拶を交しているのだった。

「昨日はごめんなさい。雄介さん。」

「いえ、こちらこそです。きれいごとばかり言って申し訳ありませんでした。」

恵美は雄介を信用し始めていた。

『この人なら。。。あたしを本当に守ってくれるかもしれない』

そう信用し始めた矢先だった。

(続く)

第9話〜11話

第9話

知美の野望

「お姉ちゃん、話があるんだけど・・・」

「なに？知美。」

姉妹ふたりが暮らすアパートの一室で、夕食を食べながら知美が切り出した。

「お姉ちゃんさあ、雄介さんとあまり進展してないんじゃない？」

「うん。。特にはね。」

「じゃあ雄介さんのこともあまり知らないのね？」

「あまりプライベートなこと聞くのも失礼でしょ？彼が自分から話してくれるときしか聞かないわ。」

「そんなときってあるの？」

「うん。。ないわねあまり。」

「それって怪しいと思わない？お姉ちゃんが好きなら、もっと自分をアピールしてくるはずでしょ？」

「その人の性格にもよるわよ。」

「ダメよ！お姉ちゃんに合う人は、もっとグイグイ引っ張ってくれる人じゃないと！お互い消極的じゃ何も進まないでしょ。」

「知美、あたしを応援してくれてるんじゃないの？」

「お・・応援してるからこそ言ってるのよ。この前、雄介さんと駅で会ったとき、確かにいい人だとは思ってたけど、お姉ちゃんをリードできるかは別問題よ。」

「厳しいこと言うわね。知美。」

食べながら話していた知美はここで箸を置いた。

「実はね、お姉ちゃん。アタシ偶然、雄介さんの同僚の人と知り合ったの。」

「え・・・？」恵美も箸を置いた。

「つまり・・・その・・・その人も同じ電車通勤の人で、雄介さんと一緒に話してるところをアタシ見たのよ。」

「そんなの・・・アタシ今まで1度も見たことないわ・・・」

「だってお姉ちゃんが電車から降りて会社に向ったあとのことだもの。」

「でもどうしてそれが、知美と知り合うことになるのよ？」

「えへへ。。それがね、その人駅でお財布落としちゃったのに気がつかなくてね、アタシが拾って届けてあげたの。」

このような知美のウソは言うまでもないが、恵美と雄介を別れさせ、良太を姉に紹介させるために用意されたシナリオであった。

「それでね、お姉ちゃん。アタシお礼にその人にランチおごってもらったんだ。そのとき少し話したんだけど、すぐ話が上手で、人を飽きさせない技を持つてるといとか・・・ランチのメニューだって、強引にアタシの分まですぐ決めちゃうほど決断力が早いのに。」

「あたしはメニューくらいじっくり見て決めたいわ。。」

恵美はまた箸を取って食べ始めた。

「お姉ちゃん、アタシが言いたいのはね、お姉ちゃんが付き合う人は、そのくらい行動力と決断力が早くて、人を不安にさせない人じゃないかってことよ！わかる？」

「そりゃ・・・そういう人の方が頼りになると思うけど・・・」

「でしょでしょ！」

「でも・・・そういう人って裏がありそうで・・・なんか・・・」

「だからそれをハッキリさせるために今度ウチに呼ぶことにしたの。」

「

「Σ（・◇・＊エッ!?。。。知美。。そんないきなり。。」
「ランチのお礼も兼ねてだけどね。お姉ちゃんもその人を見極めるチャンスよ。」

「あたしは別に。。知美の彼氏にしたらどうなの?」

「ダメよ。アタシも強引タイプだから、似た物同士はケンカばかりになるわよきつと。お互い自分がないものを持つてる同士がいのよ。」

「困ったわ。。何ごちそうすればいいの?」

「アタシが何か作るから心配しないで。」
「。。。。。」

こうして無理矢理に恵美を納得させた知美は内心ご満悦だった。

『うまくいったわ。。アタシも早く雄介さんとデートできる日が来ればいいなあ。。』

そして知美は良太に携帯メールをした。

作戦成功!!（p・q）イエイ

第10話

計画の実行

土曜の夕方、福永良太は知美と駅で待ち合わせて、彼女の自宅アパートへと向った。良太にしてみれば、すでに雄介を尾行したときに家はわかっていたのだが、当然そんなことなど言えるはずもない。

「家にいるお姉ちゃん、すごく緊張してたわよ。」

「そりゃ知らない人が来るんだから警戒はするだろうさ。」

「初対面なのに福永さんは全然緊張しないの？」

「そりゃしなくもないが・・・目的のためには冷静に行動しないからね。」

「お姉ちゃんをものにするってことね。」

「そう。そして君のためでもある。」

「くれぐれもお姉ちゃんには優しくしてね。」

「わかってるよ。しかしそれが、これから雄介との仲を引き裂こうとしてる妹の言うセリフかねえ？（＊、！、＊）フフ・・・」

「だって。。別にアタシお姉ちゃんを不幸にさせるつもりなんてないわ。ただ雄介さんと付き合うのは絶対アタシってこと。そしてお姉ちゃんのためには行動的な福永さんの方がいいと思っただけよ。」

「協力感謝するよ。知美ちゃん。」

「（〇へーへ〇） ウフツ」

こうした会話をしているうちに、二人はアパートに到着した。

恵美が玄関先で出迎えた。

「おかえり知美・・・こちらの方が？」

「そうよ。こないだランチごちそうになった福永さん。」

「はじめまして。福永良太と言います。ごちそうだなんて・・・知美ちゃんに財布を拾ってもらって助かったのは僕の方でしたから。」

「当然のことをしたまでよ。」

「福永・・・さん。妹がすっかりごちそうになって・・・ありがとうございます。ごさいました。」

「そんなかしこまったお礼されると照れちゃうなあ（～ん～）
ゞデヘヘ。それに今日は招待までしてもらって・・・お礼を言うのは僕の方ですよ。」

「まあ福永さん、とにかく狭いところだけど中に入って。」

「はい。ではお言葉に甘えてお邪魔します。」

キッチンでは知美が料理の準備をしていた。

「知美。手伝おうか？」

「いいよ。すぐ終わるから。お姉ちゃんは福永さんと座ってて。」

恵美は小声で知美にささやいた。

「そんなこと言ったって・・無理よ初めて会う人なのにいきなり話せるはずないじゃない。早く来てよ。」

「はいはい。なるべく急ぐから。先に下ごしらえしてるからもうすぐよ。」

恵美は居間に戻った。そこには良太が正座して待機していた。

「福永さん。あの・・遠慮なく足をくずして下さい。」

「あ・・はい。。どうも女性の家へ通されるのは初めてなもので、緊張しまくってます；^|^A アセアセ・・。」

「気楽にゆっくりくつろいで下さって結構ですから。」

もちろんこれも良太の芝居である。さわやかでちょっとウブな面を見せつつ、礼儀正しい自分を表現して好印象を得ようとしているのである。

「福永さん、今キッチンで知美がお鍋を作ってるんだけど。。キムチ鍋は好きですか？」

「はいっ！大好物です！いいですねえ。この寒い時期には体があったまります！」

そのときちょうど知美が両手に具のいっぱい入った鍋を持って居間に現れた。

「良かったわ〜大好物で。福永さんの好きなものや苦手な食べ物聞くの

忘れちゃったから、ちょっと心配だったんだアタシ。」

「僕は雑食ですから何でも食べますw」

知美はカセットコンロをセットして鍋に火をかけた。

「うちって、お姉ちゃんと二人つきりでしょ。お互い少食だし、普段は鍋なんてしないのね。だから1度みんな集まってにぎやかに鍋パーティーしたいと思ったの。」

「僕がひとり増えただけですよ？」

「でも男の人の食べる量ってアタシたちに比べたらハンパじゃないでしょ？」

「まあ・・確かに食いますね僕は。（＃＾・＾＃）」

「アタシたちだけじゃ、食べきらないですもん。材料も中途半端になっちゃうし。」

「福永さん、妹のお礼と言ってはなんですけど、たくさん食べていって下さいね。」

「はいっ！遠慮なくいただきますっ！」

その後、三人でテーブルを囲んで鍋をつつきながら会話は進んだ。といっても、話してるのはほとんど良太と知美で、恵美は聞き役になっていた。しかし、いやいや聞き役になっているのではなくて、話上手の良太に恵美も少しばかり気がほぐれたようだった。

そしてその恵美の様子を、良太は見逃さなかった。

「実はですね、恵美さん。あ・・恵美さんて呼んでいいですか？」

「い・・いいですよ（＃＾・＾＃）」

「実は僕、恵美さんの顔は電車の中でいつも見ていたんですよ。」
と、マイカー通勤だった良太は切り出した。

「Σ（・◇・＊エエッ!？」

「僕は残業が多いから、帰りの電車では見ませんが、朝は毎日お見かけしてました。」

「なんか・・そんなこと言われたら恥ずかしいわ。」

「あ、すいません。。。でも、清楚で素敵な人だなあって思っていましたよ。」

「そんなこと・・・ないです・・・」

「お姉ちゃん顔真っ赤よ。うふふ。。」

「こら知美!・・・ち、ちよっとお酒入ってるからよ・・・」

「でもですね、偶然とはいえ、さっきこの家へ来て、電車で見かけなかった恵美さんが玄関にいたので内心驚きましたよ。」

「ごめんなさい。アタシは全然気づかなくて。」

「謝ることなんかないですよ。あんな満員電車の中でなんか、特別オーラの出てる人でもない限り、顔を覚えるなんてことはできないはずでしょうし。」

「はい・・・」

「それに恵美さんはいつも田口としゃべってるのを見かけてましたから。」

「・・・え?」

「ああ、僕ですね、田口とは同僚なんですよ。」

「Σ(ー◇ー＊エエッ!?)」

「でも不思議でした。僕んちと田口んちは近所なんですけど、僕が電車に乗ったとき、すでに田口は前の駅から乗ってるようでしたから。」

「????????????」

恵美は戸惑い始めた。。。

第11話

マインドコントロール

福永良太は話し続けた。

「で、不思議だったもんで僕は、田口に会社で聞いてみたんです。
。。あ、恵美さんはもしかして知らかったとか・・・？」

「え・・・ええ、何にも・・・」

「うわ、僕まずいこと言っちゃったかなあ・・・じゃこの話はこれでやめましようかね？」

知美が間髪入れずに割り込んだ。

「いえ、福永さん続けて。お姉ちゃんも気になるでしょ？聞きましようよ。ね！」

「ええ・・・」

「そうですか。では話しましょう。僕が会社でそのことを田口に聞いたら怒鳴られましたよ。『余計なお世話だ』ってね。あいつはすごく気が短いんです。でも最近ここ数ヶ月、様子がおかしいんで僕も気になってはいたんです。」

「どう様子がおかしかったんですか？」

と、知美が合いの手を入れる。

「田口は帰宅時間になると、我先にと言わんばかりに急いで帰るんです。たまに飲みに誘ってもOKしてくれることがなくなりましてね。」

「それで？」

「それで僕が、『お前付き合い悪いなあ。何か急いで帰る理由でもあるのか？女か？』って言ったら、またやつはキレちゃって怒られまくりましたよ僕は。」

「お姉ちゃん・・・雄介さんて・・・なんか怖い人みたいね。」

「・・・」

「で、ある日僕はたまたま隣町に住んでいる親戚の家に用事があった、次の駅、つまりこの町の駅ですね、ここに降りたら雄介も別なドアから恵美さんと降りているのを見たんですよ。」

「いつも雄介さんはそうよね。お姉ちゃん。そして駅を出たところで挨拶して別れるのよね？」

「・・・うん。」

「そうですか？えと・・・言いづらいんだけど・・・そのときはですね、田口は恵美さんの後ろを気づかれずに跡をつけて行ったように見えましたよ？」

「キヤー！こ、こわいっ！」

知美がまたまた、わざとらしく叫んだ。

しかし、素直な恵美には知美の芝居など見抜けるはずもなく、雄介に対する恐怖心が次第に募ってきたのである。

「あ・・・すみません。やっぱりやめましょうこんな話。恵美さんを怖がらせてしまって。」

「いいえ、言ってくれて良かったわ。ありがとう福永さん。」

「ほんとにすみません。せっかく作ってもらった鍋に水が入ってしまったような。。。責任取って残さず全部食べますので僕。」

「そうしてちょうだいね、福永さん。アタシが作ったんだから。」

「はい。」

「でもお姉ちゃん、先にわかって良かったわよほんとに。雄介さんがそんなに短気でストーカーのような人だなんて。前の人とたいた変わった人じゃないじゃ・・・」

「知美っ！そのことは言わないでっ！！」

「ご、ごめん。」

「いろいろ事情があるようです。僕が人のプライベートを聞くのも失礼ですので、あえて聞きませんが、僕ができることであれば何でもしますのでいつでも相談して下さい。」

「福永さんて優しい。。ね、お姉ちゃん。」

それとなく良太に心変わりさせようと仕掛ける知美。

「ただ僕が今思うに、雄介にはやっぱり気をつけた方がいいと思いますね。」

「あたし。。あたしって。。どうしていつも男運が悪いんだろ。。」

恵美は目の前のキムチ鍋をボーツと見つめながらつぶやいた。

「恵美さん。元気出してください。僕は今までに10回はフラれてます。でもその都度、自分の精神力は鍛えられてきましたし、経験から学んだことも多かったです。恵美さんもまたひとつ強くなる第1歩だと思って前向きに生きましようよ。」

「強いよね・・福永さんは。でも・・そうよね・・そう・・強くならなくちゃね・・あたし。」

「そうよお姉ちゃん。」

「そうですとも！恵美さん。僕応援しますから。それともうひとつ・・。」

「?。」

「こんなときに不謹慎かもしれませんが、僕、恵美さんを電車で見かけてから実は一目ぼれしてました！今日こんな偶然なめぐり合わせで出会うなんて、運命と言うしかないと思いました。返事は今すぐとは言いません。僕と付き合ってください。」

「ええええー？（◎0◎）」

恵美は突然の良太の告白に度肝を抜かれた。

「あの・・あの今はちよつと・・シヨックなことばかりで・・。」

「わかってます。でもどうしても言っておきたかったんです。許してください。」

こうして3人の食事会は終わった。良太が帰ったあと、恵美はしばらくソファに横になっていた。

「お姉ちゃん大丈夫？」

「心臓に悪いわ。どうきがまだ続いてるし。」

「ぜいたくよ。お姉ちゃんモテまくりなのにWもつと楽しく気軽に考えればいいのよ。アタシは、あとのシヨックが大きすぎないように、深く考えないの。何かあったらこっちから先に捨てるくらいの気持ちで付き合うのよ。いちいち凹んでたらこっちが馬鹿を見るわ。」

「でもそれって、いつまでも信用し合えない仲ってことじゃない？」

「いいの。アタシはそれで。自分が傷つくよりとっばどマシ！」

「そう。強いわね知美は。あたしには・・・無理。」

「でもさつき福永さんも言ってたでしょ！経験から学ぶものもあるって。お姉ちゃんは確実に学んでるじゃない。いつかきつと幸せをつかむことができるわよ。」

「うん・・・ありがとう。知美。」

その後、知美は良太にメールした。

「福永さんが10回もフラれたなんて信じられないんだけど？」

良太の返信

「もちろんウソさ。あの場はああ言うしかなかった。これでまた1歩進んだな。（＊、＊）ニヤリッ」

知美の返信

「アタシはまだよ。これからもっと雄介さんに密着しないとね！」

（続く）

第12話〜14話

第12話

狂い始めた歯車

雄介はいつものように、朝の駅のホームで電車を待ちながら恵美を待っていた。だが、恵美は現れなかった。電車に乗り込む寸前で雄介はホームを見渡したが、恵美らしき女性は見当たらない。

「彼女、風邪でもひいたんだろうか。。」

雄介は最初はそう軽く考えていた。

なにせ二人とも内気で奥手どうしなので、未だにお互い携帯の登録もしていなかった。連絡のしようもないし、事情もわからぬままだ。

「しまった。。もっと早く携帯聞いとけばよかった。。」

と、今更言ってもただの結果論だった。

帰宅の電車にも恵美はいなかった。朝もいなかったのだから、帰りもないことなど予想はできたが、雄介は少しでも期待せずにはいられなかった。

しかし、2日目の朝も恵美は駅に現れず、3日目。。4日目。。そして5日目。。やはり恵美は来なかった。

雄介はいてもたってもいられなくなり、退社後、彼女のアパートの前から2階を見上げていた。しかし、玄関をノックするわけにはいかない。雄介が恵美の家を知ってるはずがないのだ。恵美を尾行して、家がわかったなど知られるわけにはいかないのだ。

だが、その事実は良太の策略によって、すでに恵美の耳には届いていることなど、雄介は知るよしもない。逆に雄介はこの日、ここに来てしまったばかりに、ストーリーカー行為をしていた確たる証拠を

見られてしまったのである。
ちようど会社から、バスで帰宅して来た恵美と鉢合わせしたのだ
った。。。

「あ。。。恵美さん。。」

雄介は顔面蒼白になった。頭をかなづちで叩かれたような衝撃が
走った。『しまったああ。。』この気持ち意外、何も浮かんで
こなかった。

一方、恵美は、雄介の姿を見た瞬間、彼がストーカーだという事
実を確信し、更なるショックが襲った。

『信じていたのに。。信じたかったのに。。』

恵美は雄介を驚愕のまなざしで見たあと、彼と言葉を交わすこと
もなく、駆け込むようにして自分のアパートの中へ消えた。

雄介も彼女に言葉をかける余裕など全くなかった。

恵美が、自分をまるで殺人者でも見るかのような恐怖に満ちた表
情で、逃げるように遠のいて行った姿だけが目に焼きついていた。

「あああああああゝ！俺ってバカだあああゝ！！」

反省しても悔いが残りすぎる瞬間であった。

「田口さん、こんなところでどうしたの？」

突然、どこからともなく現れた知美が話しかけてきた。

「あ・・君は・・」

「知美です。お久しぶりです。田口さん、うちをご存知だったん
ですね？」

「・・・・・・」

「イケナイわね。お姉ちゃんをずっと尾行してたんでしょ？」

「・・いやそういうわけじゃ・・」

「隠さなくていいわよ。もうわかってるから。アタシは田口さんを悪い人だとは思わないわ。」

「・・・え？」

「だって・・・お姉ちゃんへの情熱がそうさせたんだもの。それに田口さんは紳士だし。待ち伏せして人を襲うような人には見えないわ。」

「そりゃもちろん・・・そんなことんでもない・・・」

「でも、お姉ちゃんとはもうダメね。前にも説明したでしょ。お姉ちゃんの過去。お姉ちゃんに恐怖を与えたら絶対ダメなの！立ち直ろうとしているお姉ちゃんに対して、田口さんはそれをしたの！わかる？」

「・・・すまない・・・」

「お姉ちゃんを思う気持ちがあるんなら、もうそつとしてあげて。お姉ちゃんに関わらないで。」

「でも僕は・・・このままでは・・・」

「今は何も言っても無駄よ。」

「しかし・・・確かに僕はストーカー行為はしたかもしれない・・・」

「かもしれないじゃなくて、したのよ！」

「あ、ああ・・・したよ・・・僕はとんでもないことをした。でも僕は、恵美さんを襲ったり、観察したりするような・・・そんなマネは絶対する気はなかったんだ！それを彼女にはわかってほしいんだ。」

「アタシはわかるわよ。田口さんはいい人よ。思いが募りすぎてしてしまったことなのよね？」

「・・・うん・・・」

「じゃあ、アタシからそれとなく田口さんへの誤解を解いてあげるわ。でも急には無理よ。もっと時間がたってお姉ちゃんが落ち着いてからね。」

「ありがとう。。感謝するよ。」

「でも条件があるわ。」

「?..?..?」

「お姉ちゃんは諦めて、アタシと付き合ってよ！」

「・・・」

「1度植えつけた恐怖は元に戻らないの。いつまでもトラウマになるわ。田口さんとお姉ちゃんはどううまくいかない。でもアタシは違う。田口さんは怖くない。怖いどころかあなたはむしろ純粹。気持ちをわかってあげられるわ！」

「知美ちゃん・・・」

雄介は、知美の半ば強引だが、何か惹きつけられるものを感じていた。

『俺のことをここまで思ってくれる子もいるんだ。』

「最初からデートしてとか言わないわ。お話し相手からでもいいの。お願い田口さん・・・それに・・・お姉ちゃんの様子も逐一教えてあげることができるわよアタシ。」

知美は最後の切り札のセリフとして恵美のことを持ち出した。なるべくなら言いたくはなかったのだが、雄介と確実に付き合うのにはこの方法しかないと確信したのだった。そしてそれは功を奏した。

「うん・・・いいよ。知美ちゃん・・・僕で良かったら・・・」

こうして知美と良太の思惑が1歩1歩着実に進んでいるのであった。

雄介がアパート前から立ち去ったあと、路地の陰から良太が現れ、知美に声をかけた。

「よお、いいのか？あれで。田口は恵美さんの様子を聞きたいがためにお前と付き合うのを承知したようなもんだぞ。」

「わかってるわよ。そのくらい。でも絶対アタシだけに気持ちを切り替えさせて見せるわ！絶対に！！」

「（ ）」； ヒヤリ・同じ姉妹でこうも性格が違うとはな。

第13話

それぞれのカップル

恵美がバス通勤になったとわかった翌日から、雄介はとなりの駅まで通う意味を失い、毎朝脱力感と共に、通常の駅から電車に乗っていた。

恵美がいないと自分でもわかっているのに、乗り込むとつい、あたりを見回してしまう自分が情けなかった。

そんな中、この前携帯メールアドレスを交換した知美からは、常にメッセージが着信されていた。返信するにはあまり気乗りはしなかったが、雄介はまめにその都度返事を書いていた。知美と縁が切れると恵美とのつながりも遮断されてしまうかもしれない。そんな思いが雄介の頭の中にはいつもあったからである。

知美も馬鹿ではないので、雄介の気のない返信メールにはすぐに気づいていたが、それもちろん承知の上。常に積極的な彼女は、とにかく自分の情熱を伝え続けていこうと躍起になっていた。

それが功を奏してか、毎回週末には雄介とデートができるようになった。

雄介は知美とデート中も、恵美のことがどうしても頭をよぎったが、自分の口から恵美の様子を知美に聞くことはできなかった。

それを察知していた知美は、適度に姉が元気で生活していることだけは報告していた。雄介をあまりイライラさせるわけにもいかないと思ったからである。

知美と雄介のデートは常に動いていた。1箇所でのんびりするのではなく、あちこちのデートスポットや名所を巡ったり、レンタカーで更に遠出をしたりして楽しんだ。

会話はもちろん知美が中心だが、雄介が黙ってしまわないように、彼の言葉を引き出すような質問を交えながら、知美は知的に行動した。

デートの内容すべてが知美の計算づくだった。まったりすると、雄介が恵美のことを考え出すと思ったからだ。

男性によっては、これらの知美の行動がうっとうしいと思うかもしれない。だが、雄介は自分から積極的に女性をリードできるタイプではないので、笑顔を振りまいてグイグイ引っ張ってくれている知美に、徐々に心惹かれるようになってきた。

『俺みたいな男には知美ちゃんの方が合ってるのかもしれないな。』

一方、福永良太も積極的に、週末になると恵美の家を訪問した。知美が毎週末には雄介とデートのため、家には恵美しかいないのを熟知しているからである。

「恵美さん、今日は天気がいい。外に出ませんか？」

「え・・・でも、あたし出不精なので。。」

「じゃ僕と部屋で二人っきりがいいんですか？僕・・・我慢できるかなあ・・・？」

「！！！」

恵美はビクッと強く反応した。

良太はすぐさまそれを察知した。

「あ・・・ごめんなさい、ごめんなさい。冗談ですよ冗談。そん

なに怖がらないで。。ね、恵美さん。たまには外に出て、公園でも散歩しましょう。」

「そう・・・ですね・・・」

恵美はまだ心癒えてはいなかった。良太はいろいろ気を遣ってはくれるが、どうしても今の自分にはまだ、明るくなれる要素がなかった。

そんな恵美を見て、良太にも焦りが見え始めた。

『ヤバイヤバイ、まずいこと言っちゃったぜ・・・しかしこうも奥手だとは・・・マジやりずれえな・・・顔は可愛くて申し分ないんだが、ちよつとめんどくさそうだ。。これからどうすっか考えもんだなあ・・・』

良太の思惑の歯車が狂い始めた。

第14話

ぎこちない恋人たち

良太が、毎週積極的に恵美を訪問してから、およそ2ヶ月が経過した。

だが、いまだに恵美は良太に対して、打ち解けた態度にはなっていないかった。

いくら話術の得意な良太であっても、ほとんど自分がしゃべりっぱなし。話題に対しての反応も鈍い。しかも恵美が愛想笑いしてるのがよくわかる。

良太には益々苛立ちがつのっていった。

『こんな女は初めてだ。うまく落とせると思っただがなあ。俺が嫌なら誘いを断ればいいのにそれさえしない。一体何考えてるんだこいつは！この俺が2ヶ月経っても抱くことさえできないでいるとは。このままずっとこんな感じだったらそろそろ別な女でも捜しとくかな。』

そしてこの日も恵美を食事に誘い、良太のしゃべり中心で話が進んでいた。

「恵美さん今日は何食べたい？」

「・・・なんでもいいです。」

「えと・・・じゃ中華がいい？和食にする？パスタなんかまだ食べたくないよね？」

「はい・・・」

「じゃパスタ食べようか？」

「はい・・・」

いつもこうだった。良太にしてみると、最初のデートのうちは確かに恵美の遠慮がちな態度は、けなげで可愛らしく思えたが、時が経つと徐々に、恵美がいつもどうでもいいような返事をしているとしか思えなくなっていた。

そして、いざ席についてメニューを選ぶときも、恵美はすぐには決まらない。見かねた良太は助け舟を出す。これがもうパターン化していた。

「恵美さん、この店長のおすすめってのがおいしそうだよ。季節限定だから今しか食べられないかも。」

「・・・はい。。じゃそれで。」

良太は自分の髪の毛を掻きむしりたいほどの心境だった。これがきつと雄介だったら、なんとも思わないのだろう。

お互いメニューを見て悩みまくったあげくに、たいしたものはオーダーしない。そんなカップルも確かにいる。

だが、良太には限界が近づいてきていた。

彼は決して一途ではない。これまでGETしたい女はほとんどモノにしてきた。そして、落としに成功して自らが満足するとすぐ飽きる。二股、三股も当然だった。そんな良太が恵美落としにこんなにも時間をかけてきたのは、やはり雄介への嫉妬心とライバル心。なんで雄介みたいなウジウジした男が、こんな可愛い女と一緒にいるのか！それだけで腹が立った。しかも良太と雄介は、仕事上でもお互い成績を争っている間柄である。

「恵美さん、僕と一緒にいて楽しい？」

「え・・・？あの・・・いつも気を遣っていたいてありがたいと思っ
ています。。」

「ありがたいって・・・別に僕は君に感謝してもらうために誘って
るんじゃないよ？」

「・・・」

「もっとフランクに話そうと思ってたのに・・・君にはできないみ
たいだね？」

「あの・・・でもあたしには・・・」

「こんな長く付き合ってきたのに、君はよそよそしいままだ。
もっと打ち解けて欲しかったよ。」

「・・・ごめんなさい・・・」

「いや、謝らなくてもいいんだけどね。君の性格だし、しょうが
ない部分もある。でもね、それじゃこの先大変だよ？」

「ごめんなさい・・・どうしても警戒してしまうの・・・」

「君の過去に何があったかは詳しく知らないけどさ、警戒してる
ばかりじゃどうしようもないよ。それにそればかりじゃないし。」

「あたしには決断力がないってことですね・・・？いつもメニュー

選びには福永さんを困らせてしまうし・自分でもわかってるの。」

「いや、だからそれが悪いってわけじゃない。そんな人も他にたくさんいるし・ただ・はつきり言わせてもらうと、僕にはそれが苦痛のひとつでもある。性格上我慢できないんだ。」

恵美はショックを受けた。しかしそれは比較的軽いショックだった。

なぜならこのことは、自分の中で予測できていたことだからだ。

『福永さんのような人なら、あたしとなんかうまくいきっこない。いずれお付き合いを絶たれるわ・・』

予測していたとはいえ、良太の『苦痛』という言葉に恵美は傷ついた。

『あたしは・・人を苦痛にさせるほどダメな女なの・・？あたしは・・もう生きていてはいけない人間なの・・？』

自分に自問自答する恵美。

「君と僕は単なる性格の不一致だよ。そんなに悩まなくていい。性格の違いは誰でもあることだから悩む必要なんてないさ。」

来週もう1度、君の家に誘いに行くよ。僕と今後、フランクに付き合えるかどうか決断してみて。僕からフツたんじゃ、君はショックが大きいでしょう？君が自分で決断して、嫌だったら君から僕をフルんだよ。わかるかい？」

「でもそれって・・福永さんはあたしにフツて欲しいって言うるんでしょう？」

「いや、そうとも限らないよ。君が勇気を持って決断できたら僕は改めて考え直すよ。」

そうは言ったが、考え直すつもりなど毛頭ない良太であった。

一方、知美と雄介は順調に付き合っているかのように見えた。確かに雄介は以前より口数が増えた。知美の笑顔に対して、優しい自然な笑顔で答えてくれた。知美にはそれが何より嬉しかった。だが、雄介が話す言葉に度々、恵美のことが絡んでくるのが気になっていった。

「恵美さんと同じ場所にホクロがあるんだね。」

「恵美さんとどっちが料理上手？」

「知美ちゃんお酒強いんだねw 恵美さんもそうなの？」

「知美ちゃん予備校頑張ってるんだね。恵美さんも1浪したって聞いてたよ。」

雄介自身は軽く話しているつもりだった。知美もそれは理解していた。でもこう何度も恵美のことが言葉として出てくると、さすがに強気の知美も気落ちするのだった。

『雄介さんの中ではまだお姉ちゃんのことが頭から離れないのかしら。。アタシではやっぱり役不足ってこと。。。？』

(続く)

第15話〜17話

第15話

雄介の決断

雄介は悩んでいた。

やっぱり恵美のことが頭から離れない。

知美と話しているときも、つい恵美のことを聞いてしまう。

それは知美に失礼なことだとわかっているのに、尋ねてしまうのだ。

それを知美が嫌な顔ひとつせず話してくれるのは、自分に対する気配りであることを雄介は充分理解していた。

『俺がこんな気持ちのまま、ずっと知美ちゃんと付き合っても迷惑をかけるばかりかもしれないな。。このままだと知美ちゃんの心を傷つけるかもしれない。』

雄介がいろいろ悩んで出した結論は、やはり知美と別れることだった。

そしてその週末、雄介は意を決して告白すべく、知美との最後の待合場所へと向ったのである。

知美は待合場所のカフェに先に来ていた。

そして雄介を待ちながら、彼のことを考え込んでいた。

たしかに最近の雄介は、話は普通にするようになったが、どこか一瞬うわの空のところがある。恵美のこともいまだに気になるようだし。

自分がいくら頑張っても雄介の心は変えられないかもしれない。
この数ヶ月のうちに、知美にはだんだんそう思えてきた。

その勘が当たったのかどうか、雄介がいつもより真剣な面持ちで
カフェに入ってきて知美の正面に座った。

ふたりで飲み物を注文したあと、一呼吸おいて、雄介の方から切
り出した。彼の表情から知美はすでに感じ取っていた。彼が別れを
切り出そうとしていることを。

「知美ちゃん、君にはほんとに良くしてもらったよ。こんなに口
ベタな僕を今まで毎回リードしてくれて盛り上げてくれた。」

「・・・」

「ほんとに・・・感謝してるんだ。楽しかったし、知美ちゃんのお
かげで僕も少しは口ベタを解消できるようになったんだ。」

「・・・でも・・・アタシと別れるのね・・・？」

「・・・うん・・・ごめん・・・」

「お姉ちゃんがそんなに好きなのね・・・」

「・・・うん。。1度は忘れようとしたけど、どうしても頭から切
り離せないんだ。自分が恵美さんから遠ざかるほど、恵美さんへの
思いが募っていくんだ。」

「・・・」

「正直に言うと、最近では知美ちゃんの顔を見るだけでも、恵美
さんの面影を想像してしまうんだ。。ごめん。。ほんとにごめん。
知美ちゃん。」

「（；´Д、）ハア・・・お姉ちゃんもそこまで思われてるなん
て幸せだね・・・」

「だから今度は躊躇なく、恵美さんに告白するつもりだよ。もち
ろん今までのことは懺悔してね。」

「雄介さんは最初からそれができていれば良かったのよ。何もス
トーカーまがいのことなんかしなくても。。」

「え？福永？福永・・・まさかあの・・・」

一瞬口をつぐんだ知美だったが、雄介にフラれた腹いせもあつてか、彼女の思考回路はもうどうでもよくなってきて、逆に開き直ったように発言し始めた。

「アタシは彼の素性はよく知らないわ。でもその福永って人が雄介さんのことを教えてくれたの。確か丸菱商事に勤務してるってことは聞いたわ。そして・・・その人が今のお姉ちゃんの彼氏なの。」

「な・・・なんだってええええ？？」

雄介は呆然とした。目の前が真っ白になった。運ばれてきたコーヒーにも全く目が行かなかった。更に時間が経つに連れ、何か心の底から煮えたぎるような感情が沸々と沸いてくるのを感じていた。

「福永のやつ・・・！」

それを見ていた知美もまた、同じような感情の波が押し寄せていた。

そしてそれが言葉となって爆発した。

「雄介さん、あなたはショックかもしれないけど、アタシだって・アタシだって大好きな雄介さんにフラれてすごくショックなんだからねっ！ほんと泣きたいのに・・・思い切り泣き出したいのに・・・ずっとさっきから我慢してるんだからねっ！！アタシのこともわかってよっ！！」

知美が大声で泣き崩れた。。。

雄介は泣きじゃくっている知美をどうすることもできなかった。ただ、自分のふがいなさど、知美に対する気遣いがなかったことを深く反省していた。

『ほんとバカだなあ・・俺って。恵美さんのことばかりで知美ちゃんの気持ちを汲んであげることなんて全然考えてなかった・・・』

雄介は自分のハンカチを知美に差し出して謝るしかなかった。

「ごめん・・知美ちゃん。ほんとにごめんね・・みんな僕が悪いんだ・・今ここで殴ったっていいんだよ。」

と、その瞬間いきなりバチーン！！と雄介は平手打ちをくらった。

『すご・・反応はやっ・・』

知美はいつでも行動が機敏だった。それゆえ感情は先行する場合がよくある。ストレスを溜め込まないという意味では良い性格かもしれない。

今、雄介を殴ったのも、いち早くこの悲しみと挫折から少しでも楽になれるのでは？と、瞬時に思った知美の行動の現れだった。

「知美ちゃん・・気の済むまで叩いていいからね・・僕にはそれしかできないし。」

知美はその後、泣きながら雄介に往復ビンタを3発かませたのだった。

そして、ある程度落ち着きを取り戻すと、自分が雄介や恵美にしてきた策略の数々を後悔していた。

『アタシの自業自得なのかもね・・・』

知美は雄介から差し出されたハンカチで涙を拭いた。

「ありがとう・・雄介さん。これ、洗って返すね・・」

●翌日の日曜日 恵美と知美のアパートにて●

「お姉ちゃんアタシね、雄介さんと話をしたの。」

「え・・？」

「雄介さんはね、お姉ちゃんはすごく好きなのよ。」

「だからってストーカーは・・」

「うん。良くないわ。けど、彼に悪意や変質的なものは考えられなかったわ。ただ、彼が内気すぎただけ。つまりお姉ちゃんと一緒よ。」

「でもあたしは・・人を尾行したりしないわよ。」

「それだけお姉ちゃんが好きだったの。でも気持ちを伝えることが下手なのよ彼は。」

「・・・・・」

「昨日も言ってたわ、雄介さん。勝手に跡をつけたのは本当に悪かったって。でも大好きなお姉ちゃんを少しでも多い時間見ていたかったんですって。」

「でも・・知らないうちにこのアパートまで見られてるのは・・」

「別にいいじゃない。着替えとか見られてるわけじゃないんだから。」

「知美ったらもう・・怖いこと言わないでよ。」

「とにかく雄介さんは、自分の誤解を解きたがっているの。お詫びも言いたいらしいから1度会ってあげて。」

「ええ〜?？」

「大丈夫よお姉ちゃん。アタシも一緒にいてあげるから。」

「・・・うん。それなら。」

「で、福永さんとはうまくいってるの?」

「・・・それが・・・ダメみたい。」

「なんでよ？お姉ちゃんをグイグイ引っ張ってくれそうな人だと思っただのに・・・」

「それはそうなんだけど・・・あたしあの人のペースについていけないの。」

「お姉ちゃんも努力が必要よ？」

「でも福永さんはあたしと一緒にいると、だんだんイラついてくるのよ。悪いと思ってなんとかしようと思うと余計何も考えられなくなっちゃうし・・・」

「で、もう付き合えないって思っただの？」

「それは彼の方がそう思っただのよ。性格の不一致だってはっきり言われたわ。」

「ええっ？それほんとなの？お姉ちゃんにそんなことを。」

知美にはショックだった。あれほど姉が好きで、雄介から奪い取ることに執念を燃やしていた良太が、付き合い始めると、いとも簡単に姉を捨てようとするなんて。

『福永・・・許さない！きつとお姉ちゃんを幸せにしてくれると思って協力したのに・・・もう絶対許さない！』

「知美・どうしたらいい？次の土曜、福永さんが最後の返事を聞きにくるの。付き合う気があるのかどうか・・・」

「それっておかしいんじゃない？彼はもうその気がないのにどうしてそんなこと聞きにくるのよ？」

「それは・・・あたしがもっと福永さんのペースに合わせたら、考え直すかもしれないって・・・」

「なんなのそれって？人をバカにしてない？お姉ちゃんは福永さんの奴隷じゃないのよ！もっと気配りしてペースを合わせるのは男の方でしょ！」

「どうしよう・・・」

「お姉ちゃんの方からフツちゃいなさいよ！それにやっぱり・彼は頭の回転は確かに早くて言葉も鞭撻だけど、人に対して冷たすぎるわ。それにしたたかだし。」

「なんで彼がしたたかだってわかるの？知美。」

「だって・・雄介さんのことを告げ口みたいに報告してきたのは福永さんじゃない！それに同僚って言ってたけど、きつと雄介さんとは仲が良くないはずよ。だから雄介さんを陥れようとしたのよ！そして自分はお姉ちゃんに近づいた・・」

恵美は再び恐怖に駆られていた。

そしてその感情が言葉となって爆発した。

「もう・・一体誰を信じればいいの？！誰も信じてはいけないの？信じようとしても騙されてばかり！もうたくさん！たくさんよ！もう誰も信じない！！！」

第17話

緊急事態

土曜の昼下がりに、恵美は自宅のアパートに引きこもっていた。

知美は友達との約束があるので、朝から家を出ていた。

そんな中、恵美は時間が経つのも忘れて、ただボーッと窓の外を眺めているだけであった。

なんであたしだけいつもこんな目に遭うんだろう。。

男の人の言葉ってどこまで信じればいいの？

あたしだけに変な人ばかり寄ってくるの？

みんなはそうじゃないの？

思いつくままに自問自答を繰り返す恵美。
でもそれが結論に達することはなかった。

あたしの存在ってなんなんだろう。。。。
いじめられて、騙されて、世間からも白い目で見られて。。。。
もうあたしなんて世の中に必要ない人間ってこと。。。？

以前の忌まわしい過去の出来事以来、鬱気味の恵美が、益々深みにハマっていく一方だった。

こんなことがこれからも続くだけの人生なら。。。。
いっそのこと。。。あたし。。。。
もう疲れた。。。疲れたよ。。。。

恵美はおもむろに立ち上がり、沸かしたての熱いコーヒーを入れ、ゆっくりとまた自分の座っていた窓辺の席へ戻り、一口だけコーヒーをすするとテーブルに置いて、また窓を眺めた。

いつもと何も変わらない風景。
いつもと同じ時間の流れ。

犬の散歩をする人やジョギングをしてる人。
いつもと同じ生活のリズム

何も変わらないわ。。。変わりっこないのよ。。。。
これからもずっと。。。。

テーブルの前には多数の安定剤が置かれていた。
その中には、錠剤もあれば顆粒タイプもある。
恵美はしばらくそれらをうつろな目で眺めていた。

たくさん飲めば気持ちよく寝れるわよね。。ずっと。。

恵美は顆粒タイプの封を切り。。。それをコーヒーに注いだ。

1袋。。2袋。。3袋。。

それ以上は恵美自身も数えていなかった。

なにげにまた窓の外を眺めると、福永良太が通りの端からこちらに向って歩いて来ているのが見えた。

「そっかぁ。。今日はそんな日だったわね。。」

まるで人事のようにつぶやく恵美。

「人を陥れる男なんて最低。。大っ嫌い。。」

と、そのとき、彼女はふと思った。

あの人はもう時期ここに着く。

あの人をどうにかして、あたしを殺した犯人にするにはどうすればいいんだろう。。。ただの発見者にはさせたくない。。縁が切れてあの人が喜ぶだけだもの。。そうだ！あの人が帰ったと同時にあたしがここから飛び降りればいいんだ！助けてって悲鳴をあげながら。。近所に聴こえるように。。そうだ、そうしよう。。

しかし、恵美の一大決心をよそに事態は別な方向へ進んでいった。

福永良太が恵美のアパートに到着した。

「こんにちは。今日は曇りでちよつと肌寒いね。お邪魔しますよ。」

すでに恵美と付き合う気のない良太は以前にもまして、馴れ馴れ

しくなっていた。もう恵美に気を遣ったしゃべりなど、無意味だと思っているからである。

一方、恵美の方も何かが割り切れたせいか、良太の前で緊張もせず、けだるい口調ではあるが、対等に返答していた。

「そうね。今日は肌寒いから熱いコーヒーがおいしいわ。福永さんのも入れてきてあげるから待ってて。」

「いや、今日のはあんまり時間はないんで。その君のコーヒーでいいよ。入れたてでしょ？すごい湯気立ってるし。君のを新しく入れてきたらいい。」

「あ、でもこれは。。。」

と恵美が言うや否や、良太はテーブルにある恵美のコーヒーをすかざず取って一気に飲み始めた。

「僕、猫舌じゃないんで結構熱いの平気なんスよ。今日は冷えるし、体にしみるねー！でもこれ。。ブラック。。？にしては味が。。ま、いいや。」

良太はそれから一気に飲み干した。
そしてただひたすら呆然と見ている恵美。

良太がうつぶせに倒れた。。。。

(続く)

第18話〜20話

第18話

知美の困惑

出かけていた知美が、携帯で呼び出されて警察病院に駆けつけたのは、その日の夕方だった。

急いで恵美が搬送された病室を受付で聞くと、知美はエレベーターも使わずに一目散で階段を駆け上がった。

そして姉の病室の前にたどり着くと、そこには40代くらいの中
年男性がひとり、廊下の窓を眺めながら立っていた。

その彼は、知美が来たのに気づくと、おもむろに話しかけてきた。

「あなたが妹の高瀬知美さんですね？」

「はい。あ・・・あなたが携帯で知らせていただいた方ですか？」

「ええ。そうです。携帯でも申しましたが、南西部警察署の石原
といいます。お姉さんの携帯にあなたの名前が登録されていたので
ご連絡しました。」

「私服・・・あなたは刑事さんなんですか？」

「ええ。まあ・・・」

「で、姉は・・・姉の状態は今どうなんですか？」

「はい。高瀬恵美さんは今、鎮静剤で眠っていますが、さっきまで
は気が動転したままで呼吸困難になりそうなくらい取り乱してまし
たよ。」

「お姉ちゃん・・・ごめんなさい。。アタシが留守にしたばかり
に。。また怖い目に遭わせてしまつて。。」

知美はいまにも泣き出しそうだった。

「先ほどの電話でも簡単に説明はしましたが、高瀬恵美さんとあなたの住むアパートで、同じアパートの住人の方が、恵美さんの鳴り響く悲鳴を聞いて駆けつけたところ、茶の間のテーブルに福永良太という男性がぐったりと倒れていて、異変に気づいたその人がすぐ、警察に通報してきたということです。」

「福永さんが急に具合が悪くなって倒れただけじゃないんですね。」

「はい。残念ながら違いますね。福永良太さんは大量にコーヒーに入っていた菓を飲んでます。しかも他人の家で。とても自然死ではありません。事件性が高いです。」

「刑事さんは姉が福永さんに菓を飲ませたと思ってるんですか？」
「自然に考えればそうなんですけど・・まだちゃんとした調査はしてないんで。お姉さんも本当は警察署で事情聴取するつもりだったんですが、精神的にとっても錯乱されてましたんで・・とりあえず病院で安静してもらってから改めて取り調べをするつもりです。」

「取調ベって・・まるで犯人扱いじゃないですか！何かの・・何かの間違いです！アタシには信じられない！だって・・姉はすごく臆病者だし、人に菓を飲ませるなんて・。そんな度胸、姉にはありません！絶対に！」

「はい。・。気持ちはわかります。ではちょっとお聞きしますが、お姉さんと福永さんはいわゆる恋人と言っていいんでしょうか？」

「はい。・。そうです。」

「では最近、その二人は何かぎくしゃくしてたようなことはなかったですか？」

「・・・・・そ、そんなのアタシの口から言えません！福永さんの体が回復してから聞いて下さい。」

「残念ながら・・・さきほど連絡がありまして・・福永良太さんは亡くなられました。」

「ガ——ΣΣ（。Д。；）——ン！！そ・・・そんな。・。菓なんてすぐ胃洗浄とかすれば助かるんじゃないんですか？」

「思ったより消化が早かったようです。お気の毒です。」

知美は思った。姉と良太がうまくいってないことが知れたら恵美は間違いない犯人にされる。

他人が普通に考えてみると、誰が見ても恵美が犯人だと思うだろう。

でもなぜか知美は、恵美が故意に良太に葉入りのコーヒーを飲ませたなんて、想像すらできなかった。そして絶対そうではないと確信していた。

「雄介さんに連絡しよう。。。。」

第19話

雄介の気持ち

「まさか・・そんなことが起きるなんて・・信じられない。」

雄介は知美から事情を聞いて放心状態になった。

「もしもし雄介さん？聞いてる？アタシだって信じられないわ。

でもそんなこと言ってる場合じゃないの。現実を考えて！このままだとお姉ちゃんが福永さんを殺したことになるのよ！それこそあり得ないわ！」

「う、うん。。。。」

「雄介さん、まさかお姉ちゃんを疑ってないでしょうね？」

「いや、そんなことは全然思っちゃいないよ。まだ事実を聞いたシヨックで頭の中の整理がつかないんだよ。」

「そりゃわかるけど、警察って人を疑うことから始めるでしょ？お姉ちゃんもこれから事情聴取で根掘り葉掘り聞かれたり、責めら

れたりしたらきつと精神状態がどうかなくなってしまおうわ。」

「そうだね・・・でも僕が今恵美さんの所に行っても信用してもらえないだろうし・・・こんなことがある前に早く恵美さんの所に行つて正直に謝れば良かった。」

「それは結果論でしょ雄介さん！何かいい方法考えて。アタシひとりの知恵じゃどうにもならないもの。」

「うん。でも警察だってバカじゃないし、人ひとり殺すのって、ものすごい勇気と決断力がいると思うんだ。簡単にできるもんじゃない。だから恵美さん自身のことを警察に知ってもらえたら、きつと疑いは晴れると思うんだ。」

「だとしてもよ？警察にお姉ちゃんを知ってもらうには、過去の嫌な出来事をほじくり返されることになるのよ。今のお姉ちゃんがそんなことに耐えられるとは思えないわ。」

知美は半泣き状態だった。

アタシが福永なんかを引っ張り込んだばかりに・・・

悔やんでも悔やみきれないでいる知美であった。

「知美ちゃん、僕が恵美さんに手紙を書くよ。書き終えたら連絡するから病室に届けてくれないかな？その上で、恵美さんとの面会を希望するよ。」

「うん。わかったわ。」

翌日、知美は雄介から預かった手紙を携えて恵美の病室を訪問した。

恵美はベッドから上半身だけ起き上がっていて窓の外を眺めていた。

落ち着きを取り戻してはいたが、目はうつろだった。

「お姉ちゃん、気分はどう？」

「あ、知美。。おはよう。。うん、気分はまあまあかな。」

「お姉ちゃん、アタシがそばについてるんだから、ひとりぼっちにならないでね。」

「あたしなんて・・・どうでもいい存在だから・・・」

「それは違うわ。アタシには絶対必要なお姉ちゃんよ！そして雄介さんも同じように思ってるわ。」

「彼に・・・教えたの？」

「うん。前にも言ったでしょ。雄介さんは素直に謝りたいって。」

お姉ちゃんを思う心は本物だわ。アタシが保障する！」

「でも・・・あたしは人殺しよ・・・？」

「誰もそんなふうになってないわよ。もちろん雄介さんだって。」

「あたしが殺したも同然なのよ。もうどうなったっていいわ。」

「どうだっていいんなら、さっき雄介さんから手紙を預かって来たからちゃんと読んであげて！」

「手紙・・・？あたしに・・・？」

恵美は知美から手紙を渡された。

しばらく封筒をじっと見つめているだけだったが、宛名書きに

”恵美さんへ”と書いてある雄介の手書きの字が、あまりにも大きくてすごいクセ字だったので、急におかしくなって笑ってしまった。

「あたしと同じ、気が小さい人なのにこんな大きな字を書くなんてw」

「お姉ちゃん、それはきつと雄介さんの今の気持ちの現れだと思
うわ。読んであげて。お願い。」

「・・・うん・・・」

恵美は封を開いた。

恵美さんへ

僕は恵美さんに大変迷惑をかけました。人のあとを尾行するなんて最低の行為です。

あなたとひよんなことから通勤電車で知り合って、毎日が飛び上がるように嬉しくて楽しい日々でした。でも僕は、それを表に出す表現力がすぐ下手なのです。男らしくないのはわかっています。自分はダメ人間だとも思います。でもあなたに僕の気持ちを打ち明ける勇気がありませんでした。それが誤解を招く原因になるストーリー行為へと走って行ってしまったようです。

何度謝っても構いません。本当に申し訳ありませんでした。

決して恵美さんに対して危害を及ぼすようなことは考えていません。

これは絶対誓えます。ただ、純粹にあなたが好きでした。

いや、今もずっと好きです。あなたの偽りのない素直な笑顔、優しい言葉、柔らかな物腰。

さっきも書きましたが、通勤が毎日楽しくて、乗降する駅まであなたと一緒にいたいがために、隣の駅からあなたの街の駅までずっと通ってました。そのひとときの時間だけでもすごく充実してました。

僕にもっと勇気があったら・・・

今思うと悔やむことばかりです。そう、同僚の福永に隙を与えてしまったことです。今、恵美さんを苦しめている原因を作ったのも僕です。

僕があなたをちゃんとリードするくらいの度量があったら、あなたは苦しまないで済んだ。福永も死ぬことはなかった。知美さんも辛い思いをしないで済んだ。

ひとえに僕の責任なんです。僕がまいた種です。

手紙ではこのように偉そうなことを書いてますが、実際のところ、どう責任を取っていいのかわかりません。

ただ、今僕が決心していることは、この先、どんなことがあっても恵美さんのそばにいてあげたい。今度は絶対にあなたを守りたい。守り続けていきたい。お互い欠点だらけの人間でも、それゆえわかりあえることもあるはずです。

どうかそんなに重荷に感じないで下さい。

あなたは自然なままの恵美さんでいいんです。僕に合わせる必要なんて全然ありません。

今回のこの1件もきつと、優秀な日本警察なら恵美さんが潔白であることは証明してくれるものと確信しています。

取調べは辛いでしょうけど、心からあなたを応援しています。そしてこれからもあなたを支えて行きたいと思っています。

一方的で勝手な僕の言い分ばかり述べましたが、どうしても今の僕の気持ちをわかってもらいたかったんです。許して下さい。

長々とここまで読んでいただいてありがとうございます。
そして本当に申し訳ありませんでした。
お返事いただけたら、すぐにでも会いに行きます。

田口雄介

恵美の目から涙がひとしずく零れ落ちて手紙に落ちた。

「お姉ちゃん・雄介さん呼んでもいいわよね？」

恵美は読み終えた手紙を見つめたまま無言で軽くうなずいた。

第20話

抱かれる疑惑

「恵美さん、本当にすいませんでした。そしてこうして僕に遭ってくれて本当に・・本当にありがとうございます。」

恵美の病室を訪ねた雄介は深々と頭を下げた。

「雄介さんが悪い人じゃないのはわかりました。失礼な言い方かもしれないけど、数ヶ月お付き合いしていて、あなたも私と同じように不器用な人間だってことはわかってましたから。そんな人がウソ偽りでこの手紙の文面を書けるはずがないですもの。」

「はい。。でも僕が不器用なために、言うべきことを先延ばしにしたり、ためらうことで自分のみならず、他人にも迷惑をかけることが身にしてみてわかりました。」

「それは・・違うわ。今こんな状態にあるのはあたしの責任なのよ。」

「恵美さん、ご両親は来てないんですか？」

「言っていないの。知美にも口止めしてあるの。以前もゴタゴタがあつてすごく心配かけたから、これ以上はとても親には言えないわ。」

以前のゴタゴタ・・・

雄介は以前、知美から聞いた『恵美の正当防衛事件』を思い出した。（↑第6話参照）

「恵美さん、過去は過去です。これからを考えましょう。」

「あたしにこれからなんてあるのかしら。。」
うつろに目線を下げる恵美。

「恵美さん、僕も一緒に考えますから！あなたのこれからは僕の

これからでもあるんです。」

「やさしいのね。雄介さん。こんなあたしに。。」

「恵美さんにたまたま悪いことが重なっただけです。」

「人ひとり死んだのよ。あたしが関係してる。。たまたまじゃ済まないわ。」

「でもそれは・・過失です。福永には悪いが、色んな女性を泣かせてきて、自業自得と言うしかありません。」

「でも・・命と引き換えにするほど悪い人かしら？」

「それは・・」

「あたしは・・どんな裁きが下されてもそれに従って罪を償うつもりです。」

「でも・・言いづらいですが、恵美さんは殺意があったと疑われています。殺人と過失では刑が全然違うじゃありませんか！そんなこと認めては絶対ダメです！」

「でも・・」

そのとき、病室のドアが開いて、ゆっくりと石原刑事が入って来た。

「高瀬さん、ご気分はどうですか？こちらの方は？」

「あ・・その・・知人の田口さんです。」

雄介は石原刑事に軽く会釈をした。

「南西部署の石原といいます。失礼ですが、高瀬さんとの関係は？」

「僕は・・友達です。」

「そうですか・・まさか恋人のはずもないでしょうしね。高瀬さんの恋人は亡くなられた福永さんなんですから。」

「・・」

「ちなみにあなたは・・？」

「田口雄介と言います。」

「はい、その田口さん。あなたは福永さんをご存知で？」

「・・・同僚です。」

「ホホウ（。＊） 同僚とはねえ・・・で、彼と高瀬さんが付き合っていたことは知っていましたか？」

「はい・・・」

「それに対して特別な感情を抱いてなかったですか？」

「・・・どういう意味ですか？」

「失礼な質問は勘弁して下さい。これも仕事なもので。でもですね、あなたと高瀬さんが普通の友達であれば、福永さんとの関係に對しては何の感情も持たないか、友人として微笑ましく応援するのでしょうか？」

「・・・」

「さて、あなたはどう思っていましたか？」

「僕は・・・」

「はい、どうしました？」

「僕は・・・福永が嫌いでした。悪いですか？」

「いえ、別に悪くはありませんがね。なるほど。」

「なるほどって何ですか？」

「いえ、こちらの聞き込みですね、以前高瀬さんと毎日電車通勤でいつも親しそうに話していた男性がいましたね。同じ時間にたくさんの通勤している人たちに目撃されています。」

「・・・」

「それで私はその人たちに福永さんの写真見せたところ、全員が違うって言うんですよねえ。。おかしいと思いませんか？」

「別におかしくありませんね。誰にだって出会いと別れがあります。いつまでも同じ人と付き合っても限らないんじゃないでしょうか？」

「こりゃ1本取られましたなwあっはははは！でもですね、その時期から今回の事件までの期間があまりにも短すぎるんですね。。。」

「それは・・僕の考える問題ではありませんので。」

「あ、そうですね。どうもすみませんでした。では、高瀬さんもそろそろ回復してきたようなので、詳しい事情をこれからたっぷり聞かせてもらいますね。ではのちほど。」

そう言って石原刑事は部屋を出て行った。

「恵美さん、心配することはないよ。人間関係がどうであれ、真実はひとつだよ。」

「ええ。あたしはもう平気。どんなことでも受け入れる。怖くないわ。それより雄介さん、あなた刑事さんとも堂々と話せるなんてすごいわ。」

「僕は今、無理をしてでも自分を変えようとしてるんだ。引っ込み思案なのはもうおしまい！恵美さんを守る決心をしたんだ。強くならないと！」

「ありがとう。。でもなるべく無理はしないでね。緊張の連続が続くと崩れるのはモロいわ。」

果たして、事件の真相は正しく判断されるのか？

恵美への裁きはどう下されるのか？

そして雄介と恵美のこれからは？

知美の心中はいかに？

(続く)

第21話〜23話

第21話

思わぬ方向へ

「石原刑事。君は高瀬恵美が過失ではないと思うんだね？」

「はい、乃木署長。私は故意的な殺人だと思います。」

「理由を聞かせてくれたまえ。」

「立証できるものは何もありませんが、彼女の過去の経歴や、先ほど事情聴取した際、いささか不審な点が見られました。」

「わかってるだろうが、いささかでは何の根拠にもならんぞ。」

「はい、わかってます。」

「では君が彼女を不審だと思う点は何だ？」

「まず、気になるのは彼女が数年前にも事件を起こしていることです。」

「ホホウ（。＊）それは？」

「はい、殺人事件です。でも彼女はそのとき正当防衛が認められました。」

「どういった経緯でそうなった？」

「普段から彼女は、当時同棲していた被害者の暴力に苛まれていました。被害者は極端な酒乱で、事件当日は刃物まで乱用して暴れていたそうです。」

「それで？」

「それで被害者はかなりな泥酔状態のため、彼女の恐怖の叫びに思わず驚いて体のバランスを失い転倒した。」

「そこで刃物を落としたわけだな？」

「はい。そして再び被害者が彼女に飛びかかろうとしたとき、彼女はとっさに落ちていた刃物を握って刺した。というわけです。」
「うむ。それでそのことと、今回のことと、どう関係あるんだ？」

「直接的な関係はありませんが、刃物と薬の違いこそあれ、人間一生のうちで、同じようなことがこう何回もあるものでしょうか？」
「というと、君は今回の事件は最初から殺意のあった殺人だと？」
「私はそう睨んでいます。更に言うとき昔の正当防衛事件も、ひよっとしたらそうだったかもしれません。」

「おいおい、うかつなことは言うなよ石原刑事。終った事件を掘り起こすと厄介なことになるからな。」

「はあ・・・」

「で、さっきの取調べで不審に思ったことは何だ？」

「はい、説明致します。」

☆1時間前。 西南部署取調室 ☆

「ということは、あなたが自分で飲むために、そのコーヒーに安定剤を入れたというわけですか？」

「はい。もうそのときは自分なんかどうなったっていいと思ってましたから。」

「どのくらい入れたんですか？」

「・・・わかりません。何だか無意識にボーツとカップを眺めながらいくつもいくつも・・・」

「つまり死ぬつもりだったんですね？」

「死ぬというよりも・・・とにかく楽になりたいと思ってました。」

「

「そこに福永良太がやって来たと？」

「はい。。新しくコーヒーを入れてあげようと思ったんですが、そのコーヒーでいいからって・・・いきなりあたしのコーヒーを取って一気に。。」

「そして彼はどのように倒れましたか？」

「・・・うつ伏せに。。急に眠るように崩れました。。」

恵美は再び体をこわばらせた。

「で、これからが大事なんですが、あなたはすぐに119番しな
ったのはなぜですか？」

「それは・・・あたしも動転してましたし、ご近所の方があたしの
悲鳴に驚いて来てくれて・・・それから連絡していただきました。」

「それはおかしい。。。」

「え？なぜですか？」

「福永さんの体を調べてわかったことです。コーヒーを飲んでか
らの消化が早すぎます。あなたの話が本当だとすると、ご近所の方
がすぐ来て救急車を呼べば、福永さんは助かっていました。」

「そんなこと言われても・・・あたし。。。」

恵美の表情は緊張と恐怖でいっぱいになった。

「手法解剖の結果から推測するとですね、福永さんがコーヒーを
飲んでから救急車が来るまで、つまりご近所の方があなたの部屋に
来るまで、少なくとも2時間は経過しているんですよ。」

「。。。。。」

「何か反論は？ありませんか？あなたはわざと連絡を遅らせて、
彼を死なせようとしたのではないですか？」

「そんな・・・あたしは・・・あたしはただ・・・呆然としてしまって・
・ショックで気を失ったのかもしれないません。」

「2時間も気を失っていたということですか？」

「はい。。きっとそうだと思います。。今思い出しました。あた
しが気がつくと福永さんの目が・・・目が・・・見開いて倒れているの
に驚いて・・・大声で叫んでしまったんです。。。」

「乃木課長。いかがですか？」

「興味深いな。」

「はい。最初の彼女の証言では、福永良太は眠るようにして崩れていったとあります。」

「しかし2回目の発言は・・・」

「そうです。彼は目が開いていた。」

「そんなことがあり得るとすれば。。」

「死因の結果から2つの可能性があると言われました。」

「うむ。ひとつは薬によるものだろう。」

「はい。多量に摂取した上に時間の経過がありますから。」

「そしてもうひとつの可能性は？」

「・・・窒息死です！つまり・・・絞殺した跡はないのですが、薬で意識のない人間の鼻と口を手でふさげば可能です。」

「証明はできるのか？」

「それは・・・自白がない限り難しいと思われます。」

第22話

事件の代償

数ヵ月後、恵美には執行猶予がついた。過失が認められたのである。

つまり、福永良太が飲んだコーヒークップは、恵美愛用のカップであつたために、恵美自身が自殺を図ろうとして飲もうとしていたことが裁判官に理解されたこと。

故意に飲ませたと思われる証明ができなかったこと。動機が証拠不十分であつたこと。などがこの結果に至った経緯である。

雄介はホッと胸を撫で下ろした。

「良かったですね。恵美さん。」

「ええ・・・まあ・・・」

「これから僕が時間のあるときに必ず会いに行きますから。」

「ありがとうございます。でも・・・もう今の家にはいられないわ・・・」

「・・・そうですか。。引越しや家探したら僕も手伝います。」

「それに今の仕事も・・・数日前に職場から連絡があつて・・・もう来なくてもいいって。。」

「・・・」

「また前と同じになっちゃった。。世間でこういうものよね。。」

「でもこれからは僕がついています。」

「ありがとうございます。それがあたしの唯一の救いです。雄介さんに感謝しています。まだほんの少しだけど、前向きに考えられそうです。」

「それを聞いて僕も安心しました。」

週末、恵美と雄介は連れ立って不動産屋めぐりをしているときだった。

ちようど3件目から出てきたところで石原刑事と出くわした。

言わずと知れた今回の事件の担当刑事だった。

「ホホウ（。＊）引越しするんですか？家が決まったらちゃんと警察に報告して下さいよ。あなたは監視下に置かれてるんですから。」

「はい、わかってます刑事さん。」

「高瀬さん、随分表情が明るくなりましたね？罪が軽くなったからですか？」

「・・・」

「刑事さん、それは失礼な質問じゃないですか？」

雄介が割って入る。

それにはおかまいなく、石原刑事は話続ける。

「判決には私も従いますが、私は個人的に、あなたが故意に被害者を死なせたとも今でも思ってますよ。」

「。。。」

「どうして彼女をそんなに虐めるんですか？もう結果は出たことです！」

「いいの雄介さん。あたしに言わせて。」

「え？う、うん。。」

恵美はややうつむき加源で石原刑事に返答した。

「刑事さん、私は・・・どんな判決が出てもそれに従順するつもりでした。たとえ執行猶予がつかなくても構わないと思ってました。」

「あなたは心から被害者にすまないと思ってますか？」

「もちろんです。それで今までも随分苦しんできました。」

「では被害者の家族に対してはそれなりの償いはしてきましたか？」

「え・・・？」

「幸い被害者の福永さんには身寄りがありませんでした。彼は孤児院育ちでしたからね。」

「・・・」

「でも家族がいたとしたら、身内にとって怒りのぶつけようがないんですよ。わかりますか？」

「う・・・」

「あなたが服役してるならともかく、こうして外を歩いてると特にね！」

「ちよっと刑事さん、彼女だっけずっと苦しんできたんだ！そんな言い方ってないんじゃないですか？」

雄介は怒り心頭していた。

「刑事さん、あたし・・・どうしたらいいんですか？普通に生活し

てはいけないんですか？ 刑務所に行けと言われるのならあたし行きます！」

「いや・さっきも言いましたが、私は判決に異を唱えるつもりはありませんから。」

「それじゃなんで彼女にイヤミばかり言うんですか？」と雄介。

「ただ私はね、いくら過失でも罪を犯した人間が平然として幸せに生きているのが我慢なんのです。・・ではこれで失礼します。」

恵美は目に涙をいっぱいためて立ちつくしていた。
そっとハンカチを差し出す雄介。

「あの刑事、何か人に恨みでもあるのか？ ふざけやがって！」

「恨み。。。あたし、過去の事件のときにも相手の親族に随分なじられたわ。。」

「恵美さん・・」

「以前の彼のご両親はすでに他界されてただけど、親戚やいとかの方たちがたくさんいて・・謝っても謝っても罵声を浴びせられ続けたわ・・そしてあたしは耐えられなくなってこの街に来たの。」
「もうよろしもう恵美さん。」

「いえ、あたし・・まだそのときに謝っていない人がいるの。」

「え？」

「あたしが刺してしまった彼の・・お兄さん。」

「。。。」

「会ったことはないんだけど、話には聞いてたの。幼いころ養子に出されたお兄さんがいるはずなの。でも・・彼の葬儀のときには来なかったみたい・・」

「ということは音信不通なんですよ。普段から付き合いもなかったってことです。そんなこともう考えなくってもいいんじゃないですか？ 恵美さん。」

「でもあたし・・その人にも知ってもらって謝りたい！ 今まであ

たし逃げてた。そうよ、そうすることがあたしの義務だわ。」

「恵美さん・・・」

「人として、それを知っていながらしなかったこと。その罪が今のあたしをこんな目に合わせているんだわ。罪が軽減された分だけ、人からの非難も素直に受け止めて背負って行かなくては。」

「恵美さん、それはよっぽど強い人にしかできないよ。」

「ええ、わかってる。でも・・・コソコソ生きるのはもっと辛いわ。雄介さん、あたし今までちゃんと受け止めてなかった。刑事さんの言ったことがわかったような気がする。」

「そう・・・ですか。。」

その夜。恵美のアパート

「もしもし、彼のお兄さんの連絡先わかりませんか？」

恵美は以前の正当防衛事件の被害者でもある元彼の親族へ電話していた。

「あんたどのツラしてうちに電話して来たんだ？」

元彼の叔父にあたる人で結構、短気な性格の人だ。

「すみません。でもお兄さんにどうしてもお詫びしたくて。」

「何を今頃になって言ってるんだ！勝手によそに引っ越して逃げたったくせに！」

「はい、その通りです。だから今、改めて謝りたいんです。」

「でもなあ・・・会ってくれるかどうかからんぞ？」

「あのときの事件のことは・・・お兄さんは知ってるんでしょうか？」

「そりゃ当然だろが！」

「でも・・・彼の葬儀のときにはいらっしやらなかったって・・・」

「ああ、あいつはそのとき仕事で怪我してね。入院してたんだ。」
「そうだったんですか。。」

「そうとも。病室で腹わた煮えくり返ってたようだ。」

「。。。。あの・・・その兄さんのお名前教えていただけませんか？」

「そんなことも知らんのか？あそっか・・・やつは養子に行ったかな。苗字が変わってるか・・・何だったっけなあ。。。」

「お願いします。」

「たしか年賀状来てたなあ。。あ、これこれ。いいか？よく聞け！」

「はい。」

「石原大介だ。」

「石原さん・・・ですか？」

「そうだ。当時入院してたのは、担当していた事件で犯人に銃で足を撃たれたからだ。今は南西部署の刑事だ。」

「！！！！」

第23話

ピュアな気持ち

「ええっ？あの石原刑事が！？・・・なるほど、それだったのか。」

雄介は石原の素性を知るやいなや、叫ぶと同時に納得もした。

「あの刑事さんがあたしを恨むのも無理ないわ。」

「いや、それは逆恨みですよ。でなきゃ恵美さんが殺されてたかもしれないんですよ！」

「今考えると・・・あの人がほんとにそこまですたのかしら？って思うの。」

「泥酔状態で刃物を持っていたら、その気がなくなたって勢いに任

せて振り回してしまうものです。そしてそういう奴に限って酔いが覚めてからこう言うんです。『こんなことするつもりじゃなかった』ってね。」

「でも刑事さんはそう思っていないわ。肉親ですもの。自分の弟を信じるのが自然でしょ。」

「でも刑事なら特に、冷静に判断しなきゃならない仕事なのに！」

「みんな人間なのよ。冷静になってるつもりでも感情を抑えることなんてできないわ。抑えれば抑えるほど思いが募るのよ。恨みだって大きくなるわ。」

「恵美さん、ほんとに謝りに行くつもりですか？」

「ええ、相手が刑事さんならなおさらね。こんな形であの人のお兄さんに会えるなんて、偶然というよりは運命。あたしに行動を起こしやすいように仕向けていただいたのかもしれない。」

「誰にですか？」

「それは・・・神様かもしれないし、何か目に見えない力が働いているのかもしれない。」

「恵美さん、あなたの決意は堅いみたいですわ。僕も一緒に行きましょうか？」

「雄介さんには関係ないわ。あたしの問題。巻き込みたくないの。」

「しかし・・・」

「それにあたしは仮にも福永さんと付き合ってたの。彼が亡くなられてすぐ、雄介さんこうしてる姿ばかり見られては余計に相手の感情を逆撫ですると思うの。」

「それは・・・確かにそうですね。」

「あたしはもう大丈夫。お兄さんに正式に謝罪して気持ちをすっきりさせたいの。なじられることなんかもう平気。亡くなった人に比べれば・・・命があるんだから。」

石原の自宅・玄関前

「あの・・・今日は非番だと署で聞いたのでこちらに伺いました。」
「・・・珍しいですね。こんなとこまで来るなんて。何か私に白状しに来たんですか？」

「はい・・・実は昔の事件のことでお詫びに参りました。」

「・・・ホホウ（。・。＊）」

「今更こんな月日が経ってから言うのもおこがましいのですが・
・」

「ということは、私が誰かもうわかってるんですね？」

「はい。幼いころ別離れ離れになった彼のお兄さんですよ。。」

「でもどうして今頃詫びなんか言いに来るんですか？」

「すみません。あたし今まで怖くて怖くて。。とにかくあたしを知ってる世間の人から逃げたくて。。お兄さんに謝ることもできずに。。」

「それはあなたがしたことの報いだ。仕方ないでしょう。」

「はい。。」

「弟はね、心の優しい純粋な奴だったんだ。純粋過ぎるだけに曲がったことが大嫌いで、それを人にはつきり指摘するたびにまわりからも疎外されていった。」

「はい。。そういう人でした。。」

「離れて暮らしていたとはいえ、弟はよく俺に人間関係について相談してきたよ。俺は奴に『もっと柔軟になれ』と何度も言ったが、性格上どうにもならなかった。結局ストレスで精神的にもかなり参ってたようだった。」

「。。。。」

「酒に溺れてきたのもその辺からだろう。極度のストレスを少しでも発散するのは酒しかなかったんだ。」

「あたしは・・・それをわかっていながら何も助けてあげられなかった。逆にだんだん彼が怖くなって行きました。」

恵美の声が震えていた。

「そこがダメなんだ！苦しんでる弟にもっと共感して欲しかった。酒も一緒に酌み交わして何でも話を聞いて欲しかった。」

「はい。。。」

涙ぐむ恵美。

「確かに、酒乱になった弟も悪い！暴れるのも良くない。でもそうなる前に君が弟を居たわってくれていたらと思うと。悪いが私は君を恨まざるを得ない。弟もバカじゃない。刃物を持ったってそれはパフォーマンスにすぎない。本当に人を傷つけるもんか！」

「ごめんなさい。。ごめんなさい。。」

恵美は玄関に崩れ落ちた。そして地面に頭をこすりつけて何度も何度も泣きながら謝罪した。

「ごめんなさい。。ごめんなさい。。」

恵美はとにかく土下座のままで謝り続けた。

石原は玄関に立ったまま無言でそれをじっと見ていた。ただじつと。。

十数分が経過した・・・

声にならないくらいに泣きじゃくりながら謝罪し続けている恵美を、ただひたすら見ている石原であった。

だが、ついに彼は動いた。

「顔をあげなさい。高瀬さん。」

それでも地面に頭をこすりつけている恵美。

石原がしゃがみ込んでそっと手で恵美の顔を持ち上げた。

目は泣き腫らして真っ赤に充血している。

鼻水も止まらずに出っぱなし。

地面こすりつけた額はすり切れている。

『この涙はウソじゃない。。』石原はそう思った。

「高瀬さん。もういいですよ。。あなたの気持ちは充分わかりました。」

「でも・・・うつ・・・うつ・・・」

「私はね、あなたが逃げて、他の土地で悠々と暮らしていると思うと非常にハラワタが煮え返る思いでした。1度でいいから謝罪しに来てくれたら許すつもりでいたのに。」

「はい・・・うつ・・・うつ・・・」

「今のあなたにウソ偽りはないと判断します。私自身でもあなたの生活ぶりを調べていました。あの事件以来あなたは職も失い、精神的不安定になり、カウンセラーの指導も受けていましたね。」

「はい。。。」

「それなりに苦労はしてきたようだ。そして今日、こうしてやっと謝罪しに来てくれた。もう忘れましょう。恨みも何もかも。」

「お兄さん。。ありがとうございます。ありがとうございます。。。」

「

恵美の目から大粒の涙が溢れた。

「よく涙が枯れませんか。さ、少し休んでから帰りなさい。」

石原は恵美を抱きかかえるようにして立たせ、リビングまで連れて行きソファに座らせた。

「あなたも運が悪いというか・・・同じような事件が続くなんてね。。。」

「。。。。。」

「今回も判決は出ていることだし、私はもうきっぱりこの件から身を引くよ。これからも頑張って生きて行きなさい。」

「こんなあたしに・・・なんてお礼を言っているのか。。。」

「こんなあたしって言うもんじゃない！災いというのは人の心の隙間に入ってくるものです。引け目を感じたり、人に譲ってばかりいるといいように利用されてしまうものです。あなたの性格は優しい。でも優し過ぎるから事件に巻き込まれたり、人に勘違いされたりもするんですよ。」

「はい。。私・・頑張ります。一生懸命生きます！」

「うむ。それでいい。」

（続く）

第24話〜26話

第24話

ズレたタイミング

石原刑事に謝罪ができたことにより、ある程度モヤモヤした気持ちは晴れた恵美ではあったが、現実的に今直面している問題を考えると不安な部分の方が多かった。

次の仕事もなかなか決まらず、新住居も納得のいく物件が見つからない。雄介も毎回それに付き合ってくれているだけに申し訳なく思っていた。

「雄介さん。いつもごめんなさいね。無理しなくていいから自分の都合を優先してね。」

「全然平気ですよ。僕の予定なんて全くないですからね。」

「なんか悪くて。」

「気にしない気にしない。」

「このまま仕事も決まらなかったらバイトで繋いでいくしかないのかもね。」

「それもひとつの手ですよ。いい仕事が見つかるまでのバイトだって悪くないじゃないですか。」

「そうだけど・・・」

「確かに収入の面では生活がきつくなるでしょうが。」

「ええ。知美の予備校代は親からの仕送りで何とかするんだけど、生活費までは要求できないし。」

「そうなんですか・・・」

結局この日もこれといった仕事も家も見つからず、二人は出先で食事を共に一緒に済ませただけで終った。

しかし雄介にとっては、恵美というその一瞬一瞬が至福のときであった。それゆえ、何とか自分が彼女の役に立ちたかったのだ。

雄介は幾晩も考えた。思いつくことはひとつしかないのだが、それを恵美に言っても良いものか悩んでいた。でもこのままではらちが明かない。

「彼女と会う週末までには結論を出さなきゃ。。。」

恵美のアパートにて

「ねえ知美。あなたもう実家に戻っていいわよ。」

「え？どうしたの急に？お姉ちゃん。」

「だって、今まであたしのために同居してくれてたでしょ。」

「まだ心配だわ。」

「いいえ。あたしはもう大丈夫。知美こそこのままだと大学も受からないわ。」

「あ、わかった！生活費のことでしょ？アタシが親に言って、もっと仕送りしてもらうよ。」

「バカね。実家だって苦しいのよ。親に迷惑かけっぱなしじゃない！嫌よそんなの！」

「そうだけど。。。」

「知美もその方が勉強に集中できるわ。」

「・・・それが1番いい方法なのかもね。逆にアタシのせいでお姉ちゃんに負担がかかってくるんだもんね。。。」

「ごめんね知美。今までありがとう。」

「ホントにお姉ちゃんひとりでも大丈夫なのね？」

「頑張るわよ。もう以前のあたしじゃない。」

その週末の土曜日

「恵美さん。僕に提案があるんだけど。」

「なあに？ 雄介さん。あらたまっちゃって。」

「知美ちゃんが実家に戻るって聞いて僕の決心がついたんだ。」

「？？」

「次のアパート見つかったら、僕と二人で住もう。」

「Σ（・◇・＊エヅ！？」

「ダメ・・・かな？」

「そんなこと全然考えてなかった。」

「僕が実家を出て生活費ももちろん出すよ。恵美さんはゆとりを持って好きな仕事を探したらいい。」

「そんなにまで雄介さんに甘えちゃっても。」

「そんな他人行儀で考えないで下さい。僕は・・・僕は・・・」

「は・・・い？」

「僕は恵美さんと結婚したいです！ いえ、結婚していただけないでしょうか？」

「けっこん・・・！！」

恵美は突然の雄介のプロポーズに度肝を抜かれた。

「決して生活のための同情ではありません。今すぐ式をするってわけでもないんです。僕の気持ちは電車通勤のときから全く変わっていません。あなたとずっと一緒にいられるのなら。心からそう思っています。」

長い沈黙が続いた。

恵美は嬉しかった。涙がでるくらいに。

でも。。でも。。すぐには返事できない自分がいた。

「雄介さん。あたしも・・・あなたが好きです。でも。。このままだとあたしって存在が、ただ人に頼るだけの人間にしか思えなくて。そんなのっていけないことだと思うの。」

「。。。」

「しかもあたしは罪人。。もっと苦勞して生きて行かないと亡くなった人や親類の人たちに申し訳ないと思うの。」

「そこまで自分を追いつめなくてもいいんじゃない。。」

「いいえ。あたしの心は今でもやっぱり晴れない。ちゃんと服役して罪の償いをまっとうした方が良かったって。。つくづく思うわ。。」

「でもそれは・・正しく判決が下されたわけだから。。」

「判決は出たわ。でも・・正しかったかどうかは・・」

「え？」

「雄介さん。あたしの執行猶予期間が終わるまで待っててくれますか？」

「待たなきゃならないんですか？」

「いえ。。雄介さんが他のいい人に巡り逢えたなら別にそれでいいんです。。」

「そんな意味じゃありません。僕は何年でも待てます。でも家が見つかってすぐではダメなんですか？」

「あたしがひとりでやらなきゃ意味がないと思うの。。雄介さん、あたしたちしばらく充電期間を空けましょう。もしそれで待っていただけたなら・・喜んであなたの言葉・・お受け致します。」

「。。。はい。。」

雄介は内心がっかりした。でも恵美が強い決意で望んだことだ。ずっと待とう。待ってしよう。。そう心に決めた。

そして数日後、雄介宛に恵美から手紙が届いた。

「こ・・これは・・!!」

第25話

恵美の告白文

恵美から届いた1通の手紙。

雄介さんへ

雄介さん、この前は私の一方的で勝手なお願いを聞いていただきありがとうございます。

あなたにはどんなに励まされ、心強く思ったことか。

あなたの提案は本当に嬉しかった。できるならその言葉に飛びつきたかった。でも・・・今の私にはそれは甘えすぎ。

以前、石原さんにも言われました。被害者の身内の気持ちを深く考えたことがあるのかと。

全く考えなかったわけではありませんでした。でもあの事件にまで至った原因は被害者の彼に非があるわけで、当然の報いだと思っている悪魔的な私もいました。正当防衛が成立して私のこの心境が認められたのかと思うと、世間も同情してくれているのだと確信していました。

でも世間は冷たかった。理由はどうであれ、人を殺したのには間違いないのです。職も失い近所にも白い目で見られ、行き場を失い現在に至っているのは雄介さんもご存知でしょう。

今回の石原さんのことで、事件や事故というのは被害者に縁のある人たちをも巻き込んで、こんなに長期間悲しみや憎しみを持たせ続けて苦めていたんだということが嫌というほどわかりました。

謝罪しても今だに心が晴れません。このまま私が普通に生活する

ことはできないでしょう。それはなぜなのかわかりますか？

私は・・・私はまだ真実を話していないからです。

このことを話さない限り、私は2つの事件からの呪縛から解かれないでしょう。

雄介さん。ごめんなさい。あなたには真実を知ってもらいたいのです。

その上であなたが私の元から去って行ったとしても、後悔はしません。

私はこれから起こるすべての出来事を受け入れて生きて行きます。

最初の正当防衛事件のとき・・・私は殺意を持って彼を殺しました。記録では、とっさに刃物を持った私に彼が勢いよく飛び掛ってきて自ら刺さってしまったとあります。

でも実際は・・・彼はあのとき止まったのです。

私が刃物を持っていたのに気づき、直前で止まりました。

それなのに・・・それなのに・・・私は殺意を持って両手で思い切り彼に突き刺したのです。。彼が怖かった。彼の恐怖から逃れたい一心で行動に出てしまったのです。

次は福永さんの事件です。

私は彼が憎かった。私と雄介さんの仲を裂いたのは彼だということを知美から聞きました。そして私と付き合い始めて間もなく簡単に別れ話を切り出されました。こんな人がいるから私みたいな気の弱い不幸な女が利用され、ボロボロにされるのかと思うと憎しみが増すばかりでした。

あの日、福永さんが、私が飲むはずだったコーヒーを飲んだのは事実です。そして彼は倒れた。でも・・・私はすぐに通報しなかった。今通報したらこの人は生き返る・・・こんな人がいるとこれから

も被害に遭う女性があとを絶たない・・そう思うと私はすぐには電話をすることができなかったのです。私はそのままずーっと倒れている彼を見つめていました。放心状態でずーっと。。。どのくらい時間は経ったのかはわかりません。そのうち私の意識も朦朧としてきて・・たぶんそのあと気を失ったのだと思います。

そして気がつくと私は正気に戻っていました。目の前に福永さんが倒れている現実には恐怖が襲ってきて思い切り叫びました。あとは記録と同じでご近所の方がいらして通報していただいたのです。

私は故意に連絡を遅らせたのです。つまり石原さんの言われる通りだったのです。私はこの2つの罪を背負ったまま、普通に生活する資格はありません。

雄介さん。。私なんかを待っていてもいいのですよ。

あなたが私の元を離れて行っても決して恨むことなどありません。あなたにはあなたの人生がある。

私には償わなければならない罪がある。

今まで支えて下さって心から感謝しています。

ありがとう。雄介さん。

一緒に電車通勤しているときから大好きでした。。

高瀬恵美

第26話

秋風の空の下で

日本の四季は豊かでどの季節にも風情がある。

春夏秋冬の木々や花々をはじめ、四季折々の色鮮やかな景色やその世界。

それらは今まで決して忘れることなく繰り返されている。

幾度となく、順序通りに移りゆく季節を、常に新鮮な気持ちで迎え入れることのできる人は、果たして何人いるのだろうか？

春の息吹、夏の太陽、秋の紅葉、冬の雪景色。どれも絵になる素晴らしさがある。

しかし、それは心のゆとりがどれほどあるかで決まってくる。

繰り返される季節を辛く悲しく、永遠に長い道のりを歩いているような感覚に陥って過ごす者もいる。先は見えてはいるのに1歩がなかなか進まない。特に罪を償っている者にしてみれば、1つ1つの季節の往来がとても重く、過酷なことなのだ。

何度目かの春が来て、夏、秋、そして寒くて長い冬を過ごし、やっとまた春が来る。でもそれをあと幾度も繰り返さなくては本当の自分に春は来ないのだ。

数年の歳月が流れた・・・

とある拘置所から、ひとりの人間が刑期を終えて出ようとしていた。

季節は秋風が冷たく舞う10月下旬。

家族の迎えは頼まなかった。数年ぶりに表へ出て歩く感触をしばらく1人でかみ締めたかった。

それに・・・刑期が終わったとはいえ、あらためて謝らなくてはならない人がいる。でも会ってくれるだろうか・・・？

もう連絡の取れない所に引越しているのかもしれない。

あるいはすでに別な形で幸せを見つけて、関わりあいにならなかったのかもしれない。

とにかくそれでも探そう。そしてそれが終わったら・・・もう忘れよう。。

そう思っていた。

だがあの人は今、目の前にいた。

高い塀に囲まれた拘置所の門の向こう側に。

吹きすさぶ冷たい秋風の中、コートをまといながら立っていた。

ゆっくり近づきながら門へ歩いてゆく。

お互い目をそらさずに見つめ合ったままで。

そしてついに外へ出た。

「おかえりなさい。雄介さん。長い間、ご苦労様でした。」

「・・・来てくれたんですね。。恵美さん。。こんな僕のために。

」

雄介はすでに涙が溢れていた。

「雄介さん。もう泣かないで。ここにずっといても寒いわ。さあ、あたしの家で一緒にお茶でも飲みましょう。」

(続く)

第27話〜29話

第27話

繋がっていた心

「狭い所だけどどうぞ入って。雄介さん。」

「あの・・・本当にいいんですか？」

「ええ・・・」

「おひとりで・・・住んでいたのですか？」

「はい。」

「ご結婚されているものかと。。」

「そんな気にはなれなくて。」

「僕を・・・恨んでいますか？」

「そう見えますか？」

「いえ・・・」

「あたしには雄介さんを恨む道理がないわ。同じ罪人だもの。ただ違っていたのはあたしの正当防衛事件の方が証拠不十分だったってこと。。」

「・・・」

「とにかく中が上がって。玄関じゃ寒いでしょう。」

「はい・・・ありがとうございます。」

恵美が熱いお茶をいれ、二人は差し向かえに座った。

「おいしいです。すごく温まります。」

「長い間、御疲れ様でした。」

「そんな優しい言葉をかけてもらえるなんて・・・こんな卑怯者の僕に。。恵美さんに謝ることばかりで何もしてあげられなかったのに。。」

「いいえ、雄介さんは充分に役目を果たしたわ。」

「。。。」

「おかしいわよね。あたし本人が殺意を認めて自首したのに、立証できない上に過去の終った事件として相手にもされず・・・」

「でも恵美さんは立派でした。僕は・・・あなたのあの手紙を読むまでそんな気は全くなかった。自分のふがいなさ、情けなさに失望しました。」

「そんなことない。雄介さんだってあたしの手紙なんかなくたってきつと同じことをしたと思うわ。あたしにはわかる。」

「もう少しで福永事件まであなたを犯人にしてしまうところでした。僕は本当にバカだった。自首したとき石原刑事にも言われました。『君がもっと早く自首していれば彼女に疑いはかからなかったし、精神的に苦しめることもなかったんだぞ!』と。」

「あたしは・・・雄介さんが自首したって聞いたとき、あたしを飛ばしてくれているものと思っていました。」

「すぐに自首もできなかった僕にそんな勇氣なんかありませんでした。ただ、恵美さんが殺人罪になって逮捕されることはまずないと思って・・・僕は事実から目をそむけていました。」

「それはあとから石原さんに事情を聞いてわかったの。驚いたわ・・・」

遡ること数年前、田口雄介が福永事件に対して自首した翌日。。

「Σ(ー◇ー＊エエッ!? 田口さん・・・がですか?」

「はい。びっくりしました。あなたに続いて彼がまた自首しに来るとはね。」

石原刑事は恵美のアパートへ訪問し、事情を説明していた。

「あたしの罪をかぶろうとしているんじゃない・・・」

「僕も最初はそう思ったんですけどね。事件当日のことを聞くと

全て辻褄が合うんですよ。」

「でもなぜ彼が福永さんを殺したことになるんですか？あたしが入れたコーヒーの中の薬で亡くなったのでは・・・？」

「いや、それが違うんですよ。原因はもうひとつの理由。窒息です。」

「窒息・・・？」（第21話参照）↑クリック

「はい。鑑識の結果では最初からどちらかが死因だろうとはわかっていました。そして田口雄介が自白した内容はまさにそれ。」

「でもあたしはずっと・・・福永さんが倒れてから見ていたのに・・・」

「ですが、あなたは気を失った。事件はその後起こったのです。」

「え。。？」

「田口はあの日、福永があなたの家に来ることを知っていました。妹さんから聞いてきたようです。そしてあなたのアパートの外で福永が出てくるのを待っていました。そのときはあなたのことで話し合うつもりだったようです。」

「・・・」

「しかし福永がいつこうに外に出てこないのです、しびれを切らした彼は、あなたの2階の扉の前まで行きましたが、話し声も何も聴こえず、逆に静まり返っていたので、福永があなたを無理矢理力づくで・・・わかりますよね？」

「はい・・・」

「まあとにかくそう思ったそうです。胸騒ぎがしてドアノブに触ると鍵も開いていたので、中を少し覗くと福永がうつぶせに倒れていて、あなたはぐったりと仰向けに倒れていたそうです。」

「確かに・・・そうだと思いますが。。」

「田口はすぐにこぼれているコーヒーを見て、何かが入っていたのだと察知しました。そしてまずあなたのそばに行き、呼吸も脈もしっかりしていることを確かめ、逆に福永が虫の息であることに気

づきました。そのときちょうど福永が大きく息を吹き返したそうです。」

「え？」

「田口はとっさにあなたへの疑いを危惧して行動に出ました。もちろん田口自身も福永を恨んでいたそうです。彼はうつぶせになっている福永の顔を、敷いていた座布団の上に渾身の力を込めて押し付けました。被害者は少しもがいたようですが・・・それが原因で絶命しました。」

「・・・そうだったんですか。。でも本人の自白だけで裏づけがとれるのですか？私が自首したときもそれができませんでした。」

「田口の場合は証拠があります。まず、あなたの以前の証言から、被害者は最初はうつぶせに眠るように倒れたのに、気を失ったあなたが気がつくと、今度は目が開いていたと言いました。それはまさに窒息状態で、もがき苦しんだからです。そして二つ目が決定的だったのですが、この寒さで田口は手袋をしていました。その手で彼は福永の顔を押し付けたとき、彼の体液が手袋にわずかながら付着してまして・・・彼の部屋を家宅捜索をしたときその手袋を押収しました。捨てるか洗濯さえすれば証拠も消えてなくなっただけでしょう。」

「そう・・・ですか・・・でも私は彼があえてそうしなかったのではと思います。」

「ほー。というと？」

「彼は証拠を隠してまで罪を逃れるほど悪い人じゃありません。いつかは罪を犯した罰は受けなければならないと思っていました。できれば早く証拠を見つけて欲しかったのだと。彼もきっと自責の念に駆られていたんだと思います。このまま平然と暮らしていくには精神が持ちませんもの。」

「あなたと同じように・・・ですか？」

「はい。」

雄介と恵美は今ふたりでお茶を飲んでいる。

雄介にとっては体の芯からあたたまるお茶だった。

そして心の底からも。

「恵美さん、僕がさっさと自首しなかったばかりに、あなたに迷惑をかけてきたことを心からお詫びします。恨まれても仕方ありません。」

「そんな恨むとか・そういうことは言わないで。」

「僕はこれからあなたに何をしてあげたらいいのか。」

「・・・何かしてくださる気持ちがあるなら。」

「え・・・？」

「何かあたしにしてくださるのなら・・・あたしのそばにずっといて下さい。雄介さん。」

「恵美さん・・・」

「あたしはあなたをずっと待っていた。あなただけがあたしを理解してくれていた。福永さんのときだって、あなたはあたしの憎しみも一緒に背負ってしてしまったこと。あたしには雄介さんが必要！絶対必要なの！」

「恵美さん・・・僕も同じです。僕もあなたが必要だ。僕から言い出すべきだったのにすみません。こんなこと女性の方から言わせてしまつて。」

「一緒にいて。。お願い。」

恵美は思い余って雄介の胸に顔をうずめた。

「今の僕には経済力も何ありません。苦勞かけっぱなしかと思えますけど。。それでもいいですか？」

「はい・・・」

「嬉しいです。恵美さん本当に嬉しいです。僕、絶対頑張りますから！絶対ここから這い上がってみせます！」

恵美と雄介は、今までの心のうちを全部さらけ出して理解を深めあい、そしてこの夜ふたりは、数年の歳月を経て初めて結ばれたのである。

第28話

知美のそれから

「お姉ちゃん。あたしの婚約・破談になっちゃったよ。。」

知美が恵美の家に入ってくるや否や、その言葉を発したとたんに大声で泣き崩れた。

「何があつたの知美？ どうして？ あんなに順調だったじゃないの。」

知美は泣きじゃくるばかりでしばらく返答もできなかった。

「彼とケンカでもしたの？ それともあなたが彼に気に障ることでしたの？」

「違うよ・・・」やっと出た言葉。でも知美の声は震えていた。

「彼のお母様が・・・一方的に婚約を破棄させたの。。」

「そんな・・・おかしいわよ。向こうのご両親だって喜んで賛成してたはずじゃ・・・」

「うん。。でもそれが急に今日になって。」

「で、彼の気持ちはどうなの？」

「彼は・・・一人っ子の大事な御曹司だし、お父様の会社の跡取り。親に逆らえるはずないわ。」

「いったいどんな経緯でそんなことに・・・」

「それなんだけど・・・実は。。」

知美の彼の大邸宅（第5応接間にて）

「知美さん。率直に申し上げますけど、うちの宗則むねのりとの婚約は解消してもらいます。」

この日、彼の母親から急に家に呼ばれ、席に着くなりいきなり言われたのがこのセリフだった。あまりに唐突すぎて、知美にはすぐは飲み込めなかった。

「え・・・？ 解消って・・・え？」

「言葉通りです。この話はなかったことにします。」

「あの・・・理由がわかりませんが。」

「それはこれから説明します。理由もわからずに婚約解消ではあなたも納得できないでしょうから。」

「はい。。。」

「知美さん。あなたには悪いんだけど、ちょっと素行調査をさせてもらったのね。」

「・・・探偵さんがあたしを調べたということですか？」

「そうよ。うちのお抱えの興信所ですけどね。」

知美は啞然としたが、徐々に冷静さを取り戻してきた。

「それで・・・あたしのどこがいけなかったんですか？」

「あなた自身には別に問題がなかったんですけど。。。」

「どういうことですか？ わかりません。」

「じゃ、はっきり言うわね。あなたのお姉さん、以前犯罪に関わってますよね？」

それを聞いて知美はショックを受けた。

「でも・・・でもそれは姉が巻き込まれただけです。辛い思いをしてきたのは姉です。」

「それだけじゃないわ。しかもそのお姉さん、今は殺人を犯した

人と一緒に住んでるようだけど、本当なのですか？」

「・・・はい。。」

「ゆくゆくはその前科者と結婚するつもりなのでしょいか？」

「そ・そうだと思いますけど・・・でもその人はちゃんと罪を償って、今は真面目に働いてます。そのどこがいけないんですか？」

「あなたはわかってらっしゃらない。普通の一般家庭ならともかく、うちの企業グループは歴史と伝統を持つ親子5代に渡って受け継がれて来ている由緒ある会社です。宗則はもう時期、このグループのトップに立とうとしています。」

「・・・」

「それをあなた、嫁ぐ嫁の身内に犯罪者がいるなんて。。そんな人たちとは縁戚にもなりたくないわ。」

「そ・そんな。。」

「私たち上の者は、部下たちに良い手本を常に見せなくてはなりません。弱みを見せると足元を引っ張られる原因にもなりかねません。」

「弱みって・・・あたしたちは弱みになるのですか？」

「あなただってもう20歳そこそこの小娘じゃないんだから、いい加減わかりそうなもんでしょう！うちのような注目される企業は特に世間体が大事なの。余計な噂がたつとね、これ見よがしに追い落とそうとするライバルたちが山ほどいるの。」

「あたしじゃダメってことなんですね。。」

「あなたの学歴に関しては・・・まあまあですけどね。予備校へ1年行ったあと、某有名大学の薬学部を経て、某大学病院に勤務。でもね、うちの社員はすべて超エリートなの。この意味わかる？」

「・・・」

「つまりあなたがこの家に嫁に来るということは、いずれ社長夫人。エリート社員たちの上に立つことになる。彼らが納得すると思う？」

「ではあたしの学歴が問題であって、姉たちは関係ないんじゃないな

いですか？」

「あなたホントに甘いわね。ゴシップというのはすぐにバレるのよ。特にマスコミっていうのは、ゴシップ探しに目くじら立てて飛び回ってるの。そして世間もそれを興味津々で注目してるの。そうそう隠し通せるもんじゃないわ！」

「それなら・・最初から反対して下されば諦めもついたのに。」

「宗則ももういい年齢になってるし、あの子が結婚を口にしたときは私も嬉しくて舞い上がってしまったのね。すぐにあなたの素行調査さえすれば婚約まで到達することはなかったのに。。その点は謝ります。」

「・・・宗則さんも・・このことは納得したのですか？」

「あの子には私から言いきかせます。用件は済みましたのでどうぞお引取りを。」

再び恵美の家

「そうだったの。。ごめんね知美。」

「お姉ちゃんが謝ることないよ。」

「いくら年月が経っても・・人に迷惑かけちゃうのね。。あたし」

「アタシ、お姉ちゃんに迷惑かけられたなんて全然思っ
てないから！」

「でも実際はそうじゃない。知美の人生も変えてしまったわ。」

「お姉ちゃん、今日はここに泊まらせて。家に帰りたくないの。」

ダメなら雄介さんが仕事から帰って来るまででもいいの。」

「彼も久々にあなたを見て喜ぶわよ。泊まっていきなさい。」

「ありがとう。お姉ちゃん。」

第29話

宗則^{むねのり}という人物

帰宅した雄介も知美の婚約破棄の事情を聞き、神妙な面持ちになっていた。

「ごめん。知美ちゃん。僕は君に迷惑かけっぱなしだね。」

「ううん。雄介さん気にしないで。お姉ちゃんにも言ったけど、アタシ本当に全然そんなふうに思っていないから。」

「こんな大事なことでまで影響があるなんて。。」

「もういいの。思い切り泣きたい捌け口が欲しかっただけなの。お姉ちゃんたちにしか言えないんだもん。」

恵美と知美の両親は、過去の事件以来、ほぼ勘当状態であった。

また雄介の実家でも福永事件以来、世間体を気にする両親は、家も引越し、ひっそり身を潜めながら暮らしており、雄介とも連絡も全くといっていいほど途絶えていた。

「僕がこんなこと言える立場じゃないけど、今の時代に本人たちの意思を度返して、一方的にそんなことできるなんて信じられないよ。」

「アタシも今になって思うわ。家柄だけを重んじるなんて、昔の武家か貴族みたいでしょ？」

「なんとかならないものかな？」

「いいの。宗則さんのお母さんと一緒に暮らすのなんてご免だもの。」

「でも彼自身の口からは婚約破棄のことは聞いてないんだよね？」

「そうだけど。彼の携帯にかけてもでないの。」

「・・僕が彼に会って、彼自身の真意を確かめて来ようか？」

「いえ、アタシが明日彼に会いに行くわ。自分の問題だもの。」
「そっか。。」

翌日は日曜だった。

知美は身支度を整え、恵美と雄介の住むアパートを出ようと玄関を開けたと同時に、扉が外の誰かにぶつかった。知美はすかさず、

「あ、すいません。大丈夫ですか？。あっ！」

知美がびっくりしたのも無理はない。目の前にいたのは自分の彼氏、宗則本人だったのである。

「どうしてここがわかったの？」

「おふくろ御用達の興信所に聞いて来たんだよ。びっくりさせてごめんね。」

「宗則さんも知ってたの？探偵さんがあたしの身边を調べてたの。」

「全然知らなかった。母が勝手にしたことなんだ。許してほしい。」

二人の玄関での会話を小耳に挟んだ恵美が、声をかけた。

「はじめまして。姉の高瀬恵美といいます。玄関ではなんですよ、こんなところでよろしかったらあがって話を聞かせてもらえませんか？」

「はい。今日はそのつもりで来ましたので。」

居間には恵美と雄介、そして知美と宗則が、長方形のテーブルにそれぞれ隣どうしで対面する形で座っていた。

「こっちから行こうと思って、出かける寸前だったのよ。」

「そうだったんだ。間に合って良かったよ。」

次に恵美が問う。

「妹の婚約破棄はあなたも認めてしたことなんですか？」

「いえ、僕は認めてませんよ。母が僕が仕事に勝手にしたこと

です。」

「じゃあ、妹と婚約は解消しないと約束していただけのんですね？そしてお母様を納得させていただけのんですね？」

「母を納得させるのは・・・難しいと思います。たぶん無理ですね。」

雄介が言った。

「僕らのせいで、知美ちゃんにこんな思いをさせて本当に悪いと思っています。でもそんな理由で結婚できないなんてあなたはそれでいいんですか？」

宗則は雄介をじっと見ていた。

「あなたが田口雄介さんですね。失礼ですが・・・こないだまで服役していらした。」

「はい。僕のことです。もうほとんど調べていらっしやるからおわかりでしょうが、人を殺しました。それが理由で今回のことが破談になるのなら、僕は彼女たちの前から消えます!!」

「雄介さん・・・!」

恵美は凍りついた。それ以上言葉も出ない。

知美も驚きながら雄介を見つめていた。

そしてとっさに言う。

「雄介さん。それだけはやめて! アタシ、お姉ちゃんを犠牲にしてまで結婚しなくていい! お姉ちゃんには雄介さんしかいないのよっ!」

「しかし・・・」

「お姉ちゃんが不幸になって、アタシだけ幸せになるなんてあり得ない! 雄介さんはアタシのことなんかよりお姉ちゃんのことだけを考えてあげて! お願いだから。」

「そりゃわかるけど・・・じゃどうすればいいのか。」

「いいのよ。知美。あたしは自業自得なの。まだ罪の償いが終わらないのよ。」

宗則は恵美と雄介をじっと冷静に観察していた。まるで何かを確かめるかのよう。そして口を開いた。

「皆さん、そんな悲観しないで下さい。確かに僕は母を納得させることはできません。いや、納得させるつもりもないんですが。」

「それで悲観すると言われるても。」と知美が言う。

「でも僕は知美さんと結婚します！今はっきりと決断しました。」

「宗則さん・・・でもお母様は？」

「母はうちの企業グループの行く末のことばかり考えているんです。父の跡継ぎは弟に任せて僕は独立するつもりです。」

知美は心配そうに言う。

「でも・・・そんなこと許してもらえるのかしら？」

「この独立はね。ずっと以前から思ってたことなんだ。今急に決めたことじゃない。もう下準備も整っているしね。」

恵美も不安そうに言う。

「でも・・・裸一貫で事業を始めるなんて・・・かなりの冒険だわ。」

「確かに冒険ですけど、独立を前提にして僕個人の資産をかなり残してあります。また優秀な人材を数名、機密のうちに今の会社より抜擢してあります。貧乏からのスタートではありません。」

「（！o！）オオ！（！o！）オオ！それは素晴らしい！」雄介は絶賛した。

「良かったわね。知美。じゃ絶対妹と結婚して下さるのですね？」

「はい。以前からそう決めてました。ただ、母が今回のことで探偵を使って田口さんやお姉さんの素性を調べ、すごく恐ろしいことをしてきた人たちで、まるで人間じゃないような言い方をしていたので。」

「それは・・・ひどいわ。」

「すいません。母はいつもオーバーリアクションで言う人なので。だから余計に自分の目であなたたちを訪問して、そしてお話をさせていただき、母の言ったことが真実か確かめてみようと思ったのです。」

「それでいらしたんですね。」と恵美。

「はい。人の家系やまわりの親戚関係を気にするなんて、母は時代遅れもいいとこだ。それに・・・」

「それに？」知美が聞き返した。

「田口さんもお姉さんも随分苦労されてきたようだ。恐ろしい人間だなんてとんでもない。先ほどの発言といい、人に思いやりのある素晴らしい人たちですね。ここに来て本当に良かったです。」

恵美も知美も、そして雄介も、お互い顔を合わせて微笑んだ。

「妹をどうかよろしく願います。」

「それは任せて下さい。でも企業から独立するので、結婚式はちっぽけでささやかな式になりますますがよろしいですか？」

「アタシ、ど派手なのは苦手ですからw」

「それなら良かった。」

(続く)

第30話

第30話

揺るぎない決意・前編

AM 9..20

「じゃあ散髪に行ってくるよ。教会まで近いから、散髪終わったら直接行くよ。」

「はい。じゃ時間に遅れないでね。」

「うん。まだ余裕あるから大丈夫。」

今日は知美と宗則の結婚式。しかも彼が言ったように、極々ささやかなもの。招待客にしても、工作上、独立する上で引き抜いた信頼のあつい部下たちと、わずかな親友のみが呼ばれ、宗則は両親さえも呼ばなかった。

AM 10..15

恵美のアパート前に知美と宗則が車でやってきた。

「お姉ちゃん、一緒に行こう。」

「え？ あなたたちの方が早く行かないと準備に大変でしょ？ あたしはあとで行くから先に行ってて。」

「お姉さん、ダメですよ。早めに行かないとお姉さんだって何かとバタバタしますよ。待ってますから一緒に行きましょう。」

「え、ええ。そう言っていただけのなら・・・すみません。じゃ急いで支度するわね。」

恵美は、知美たちに遠慮していた。自分になるべく、この二人の

時間に入り込まないように、そして邪魔にならないように気をつけていたのだ。今日も本来なら、一步遅れて教会へ向う予定だった。

数分後、恵美の支度も整って、3人が車に乗り込み式場へと向う。その車の助手席で知美はうかれ気分で言う。

「昨日までの長雨も、今日はまるでウソのよう。」

「自然も味方してくれたのね。おめでどう。知美。」

「ありがとうお姉ちゃん。そしてお姉ちゃんもね！」

「？」

AM 10:50

まさに秋晴れの吸い込まれそうな青色が、空いっぱい広がっていた。

3人は式場に着くと、待ち構えていたお世話係スタッフが近寄ってきた。

「お待ちしておりました。まずはお茶でも飲んでおくつろぎ下さい。」

3人はスタッフの指示通りに控え室に案内されて、熱いお茶を飲んだ。

知美のハヤる気持ちも落ち着いたようだった。

「じゃ、あたしは向こうにいるから、何か用があったら呼んでね。」

恵美がそう言ってその場を去ろうとする。

「ちよっと待って！お姉ちゃん。」

「どうしたの？知美」

「お姉ちゃんもよ！」

「・・・え？どういうこと？」

「お姉ちゃんもこっち来て衣装合わせするのよ！」

「??何の衣装合わせなの?」

「もう、カンが悪いわね。ウェディングドレスに決まってるでしょ!」

「Σ(ー◇ー*エエツ!?でも・・・あたしは。。」

宗則が話をきり出した。

「お姉さん。心配ありませんよ。うちのスタイリストが数種類の衣装を持参してきてます。サイズは速攻、補正します。遠慮なくどうぞ。」

「そんな・・・でも雄介さんが。。」

「実は雄介さんはもう知ってるんですよ。」

少し遡ることAM10..35

散髪が終わった雄介は踊るような気持ちで教会に向っていた。

式場はこののどかな河のほとりにある。天気も今日は最高!時間にもまだ余裕がる。今日という日を噛み締めながら歩いて行こう!

雄介の足取りは軽やかだった。

普段は気にも留めない小鳥のさえずりさえ、今日は祝福の歌に聴こえる。遠くに広がる田園風景はいつにもまして風情がある。そして反対側の河川敷では子供たちが楽しそうに水遊びをしている。

みんな幸せそうだ。。俺も恵美を一生幸せにしないと。。

そしてあんなふうに自分の子供と元気で外で遊べるような・・・

あっ!!

そのとき、河川敷で遊んでいる子供のひとりが深みにハマった。どうやら川の奥へ進みすぎたようだ。

あぶないっ！流されるっ！

折りしも昨日までの長雨で、川は増水していた。しかも流れが速い。

子供はたちまち雄介の予測通り、流されはじめた。

「やばいぞ・・・これは！」

雄介は流される子供と平行に走った。

「しまった・・・携帯を忘れた！」

雄介は走りながら戸惑った。

「しばらく泳いでないが。。でもこのままだと間違いなくあの子は・・・」

まわりを見回しても他に大人は誰も見当たらない。

誰か泳ぎが得意な人がいてくれたら・・・

決断が早急に迫られていた。

「もう自分しかない・・・」雄介は意を決した。

「人をアテにしている俺は恵美さえも守れない！よしっ！」

雄介は川に突進した。

冷たい川の水が思った以上に体力を消耗させる。

泳いで進んでいるというより、雄介も流されながら進んでいる。

「あと・・・もう少し・・・」

雄介は渾身の力で川の流れに抵抗しながらも子供に追いついた。

「問題はこれから・・・」

抱きかかえた子供と一緒に流されながらも、徐々に川の端へと向かう。

だが、冷たい水は急激に体力を奪ってゆく。

「どこか捕まるところは・・・ないのか・・・」

雄介のわずかな視界に、赤くチカチカ光るものが見えた。

「しめた・・助けた。。うつ・・苦しい。でももう少し。。」
薄れゆく意識の中で雄介は懸命に泳いだ。

「死んで・・たまるか。。。恵美・・・恵美・・・」

（続く）

第31話

☆最終回特別ロングバージョン

揺ぎない決意・後編その1

AM 11:10

「こんな大事なこと、雄介さんも知ってるの？」

恵美は不思議そうに宗則に聞いていた。

「そうですよ。今日は僕と知美。そして雄介さんとお姉さんの合同結婚式ですからね。」

「そんな・あなたたちに悪いわ。今日の主人公はあなたたちよ。あたしたちが出る幕じゃないのよ！でしゃばるわけには。。。」

「全くお姉ちゃんたら、やっぱりそう言うと思った。だから内緒にしたのよ。」

「僕たちのことは全然気にしないで下さい。お二人ともご苦労されてきたんですし。嬉しいんですよ僕らだって。お姉さんたちとうして式を挙げられることをね。」

「でも・・何から何までお世話になってしまって。本当にいいのですか？宗則さん。無理はなさらないで。」

「無理などしてませんよ。この企画を提案したのは、実は雄介さんなんです。僕はそれを聞いて即決しましたよ。」

「え・・？」

「雄介さんが、僕のところに頭を下げて話をしに来たんです。」

「彼が・・そんなことを・・」

「はい。恵美にどうかウェディングドレスを着させて欲しい。そして式も合同で挙げさせてもらえないかとね。」

「。。。。」

「しかも式にかかった費用は2組分、全額払うと言われました。」

一生かかっても、どんなことをしても必ず返しますと何度も僕におじぎをしました。」

「雄介さんがそんなことまで。。。」

「僕は雄介さんの心にうたれました。幸せになるのは僕と知美だけじゃない。ささやかな式ではありますが、お姉さんと雄介さんだって、一緒にこの幸せなひとときを体験しなければならないんだと思っただのです。知美も同じ気持ちだろう？」

「そうよお姉ちゃん。お姉ちゃんと一緒なら幸せも倍増しそうよ。」

「ありがとう・・・ほんとにありがとう。。。」

「お礼なら雄介さんに言って下さい。でもまだ・・・到着してないようですね？」

AM 11:40

式の時間が迫っていた。だが雄介は姿を見せてはいなかった。

恵美を始め、知美あ宗則、そしてスタッフたちにも不安がよぎる。

「携帯にも繋がらないの。。。」と恵美。

「どうしちゃったんだろうね？雄介さん。。。」

そんな中、ひとりのスタッフが外から走ってやってきた。

「あのー、この川のちよつと先に救急車やパトカーが停まってるんですよ。」

「それがどうかしたのか？」と宗則。

「人が集まってたんでちよつと覗いて見たら・・・」

「うん？」

「子供と大人の男性が岸に横たわっていましたけど・・・」

「え！！？」恵美の鼓動がドクツと鳴った。

「どうやら今、救急隊が介抱してるようでしたがまだ・・・」

異常な胸騒ぎを感じた恵美は無言のまま、教会を飛び出した。

「そんなはずない・・・そんなはずない・・・彼じゃない・・・絶対彼じゃない！」

恵美は無我夢中で走った。遠くでパトカーの灯りが赤く光っている。

恵美は無意識に自問自答していた。

『なんで泣くの？恵美。まだ見てもいないのにわからないじゃない！泣いちゃダメ！雄介さんなんかじゃないったら！』

宗則と知美も恵美の跡を追った。

「まさか・・・そんなことは。」

「お姉ちゃん・・・」

AM 11:55

恵美が息を切らしながら現場に到着すると、救急隊員が現在もお、横たわっている子供と大人の男性に、人工呼吸や心臓マッサージを懸命に施していた。

「雄介さん。。雄介さんっ！！！」

恵美は一目で彼だと確認した。

「雄介さん！起きて！起きてお願い！起きて！」

恵美は彼の体を揺さぶる。

すぐさま、そばにいる警官に取り押さえられなだめられる。

「とにかく落ち着いて下さい。今、隊員が懸命に蘇生させてますから・・・」

「いやあああああああ！！！！」

恵美は半狂乱になっていた。

少し遅れて到着した知美と宗則も愕然としていた。

「お姉ちゃん・・・」

「まさか、こんなことが・・・」

恵美は知美をの顔を見るなり、彼女に抱きついて大声で泣きじやうくった。知美も強く恵美を抱きしめた。姉にかけてあげる言葉が見当たらない。ただ痛いほどわかる恵美の心情を思うと一緒に泣くばかりだった。

雄介の脳裏では、今まで生きてきた様々な出来事が、一瞬のうちに流れ続けていた。特に恵美との出会いは鮮明な画像で、当時自分が心踊るような心境であったことまでリアルに映し出されていた。恵美との電車での出会い。遠くから見つめていた恵美の姿。たどたどしい会話。恵美に会うためだけの自転車通い。そして緊張したデート。

『これが・・・走馬灯というもののなか。。』

雄介はそう思った。

『じゃあ・・・俺は死ぬのか・・・』

走馬灯を観ながら考える雄介。

『いやだ！絶対死さない！こんなことで死ねない！恵美をひとりにできるもんか！まだ恵美に何もしてあげていないのに・・・このままじゃ俺はただの大バカ野郎じゃないか！』

走馬灯の画像から一転して暗黒の闇の世界になった。

どこをどう歩いても走っても暗闇から抜け出せない雄介。

『俺は本当にこれで終りなのか・・・』

すると闇の中に突然切れ間が生じ、その中から手を差し出している者がいた。まだ暗くて顔まではよくわからない。

『しめた！これが救いの手なのかもしれない。』

雄介はとっさに差し伸べられた手を握った。

と、同時にものすごい力で暗黒の切れ間に引っ張り込まれそうに

なった。雄介は嫌な予感がして、その力に抵抗した。

そして雄介が逆にその手を一気に引っ張り込んでみると、それは。

それは福永良太だった。

「田口、無駄な抵抗だ！早くこっちの世界へ来い！」

「福永・悪いが俺はまだ行けない。」

「ふざけるな！お前が俺にしたことをわかってるのかっ！」

「すまない福永。あとでこの責任は必ずとる！お前と地獄でとん付き合うから、今だけは勘弁してくれ。頼む！約束する！」

「雄介は福永の握った手を力づくで振り切った。」

後編その1（続く）

エピローグ

揺ぎない決意・後編その2

P M 1 2 … 0 5

救急隊員が言った。

「とりあえず、このまま蘇生術を施しながら病院へ運ぼう。」

「あたしも・・あたしも一緒に・・」

恵美が声にならない言葉で言う。

「あなたは少し落ち着いた方がいいから救急車には乗らない方がいい。行き先はXX病院だから、そこのお知り合いの方に連れて来てもらいなさい。」

「お姉さん。僕が送ります。いったん教会に戻って、荷物をまとめてすぐ病院に向いましょう。」

P M 1 2 … 2 5

「早く片付けて急がないと・・」

教会に戻った恵美だったが、いまだ気が動転している上に鼓動もかなり高鳴っていた。

「このままじゃお姉ちゃんの精神もどうかなってしまいうわ。」

「うん。そうだな・・」

その光景を見るに見かねた神父が、恵美に声をかけた。

「そのあなた、とにかくまずは、腰を落ち着けてゆっくりお茶を飲みなさい。」

「こんなこきにお茶なんか・・」

「だから飲むんです。あなたが騒いでもどうにかなるものではありません。」

「でもあたしそんな気には・・・」

「いいから飲みなさいっ!」

「・・・はい。」

恵美は差し出された熱いお茶を飲んだ。

「ゆっくりですよ。ゆっくり。徐々に冷静になれます。落ち着いてくると現状をしっかりと把握できますし、正しい判断もできます。」

恵美は言われるがままにゆっくりお茶を飲み干し、大きく深呼吸をした。

「神父さん、ありがとうございます。だいぶ落ち着きました。」

「そうでしょう。こうした方が次の行動も余計に迅速にできるので。」

PM 12:40

宗則は教会に集まってくれたスタッフや友人知人に事情を説明し、教会側にも式の中止を申し入れた。

「ごめんね。。知美・宗則さん。。そして集まっていたいた皆様。。本当にごめんなさい。」

「お姉ちゃん謝らないで。式より人の命が大事でしょ! さ、そろそろ病院に急ぎましょう。」

「ええ・・・そんなことがあっても、もう覚悟はできてるわ。」

恵美は式場となるはずだった会場を見渡した。

「あたしには・・・贅沢だわ。。」

身支度も整って、恵美たちが会場から外へ向おうとしたそのとき、入り口のドアが静かに開いた。少し照明が薄暗い会場にドアから細い光が差し込んだ。

ドアからは数人の人間が静かに入って来たが、恵美にはその中のひとりの人間しか目に入らなかった。

「雄介さんっ!!」

そう、まぎれもなく彼は田口雄介だった。

濡れた体で、救急隊員にタオルを巻かれ、両脇を支えられながらも彼は自分の足で立っていた。そしてしっかりと目で恵美だけをとらえて見据えていた。

「恵美・・遅れてすまない。結婚しよう。今ここで。」

恵美は雄介の元に駆け寄った。

「雄介さん・・良かった。本当に良かった。あたし・・もう生きて行けなくなるところだった。」溢れんばかりの涙を流す恵美。

救急隊員は言う。

「あのあと、彼はすぐに息を吹き返しましてね。病院へ運ぶ説明をしたんですが、どうしてもこの教会へ行くんだと突っ張ってきかないですよ。・・私たちの根負けです。」

雄介が言う。

「すいません。でも、どうしても今日、僕たちは結婚しなければならいんです。これが終わったら病院でもどこにでも行きますから許して下さい。」

「ほら。こんな具合に強情なんだ。しかし命にはもう別状ないでしょう。彼に助けられた子供さんも意識が戻りましたし。」

かつての内気で臆病だった姿など、見る影もないほど、雄介は精神的にもたくましくなっていた。

宗則がすぐさまスタッフに声をかける。

「準備はすぐできますか？」

「はい。もちろんです。」

「彼と彼女の衣装も？」

「お任せを! 大至急致します。さあ、みんなもかかれ!」

「はいっ！」

スタッフ全員、いや誰もがみんな満面の笑みで、意気揚々と式の準備にフル回転で動き始めた。

友人たちからは式の決行に歓声があがり、雄介と恵美に拍手喝采を送った。

「お姉ちゃん、良かったね。」

「ありがとう知美。でもごめんね。」

「何が？」

「あなたたちの結婚式なのに。」

「いいえ、アタシとたちお姉ちゃんたちの結婚式よ。もうそれ言うのはやめてね。雄介さんはちゃんとお姉ちゃんのために指輪まで用意してるんだからね！」

「え・・・？」

「式のために今は神父さんがちゃんと預かってるわ。」

「知美ちゃん、それは式までまだ内緒に・・・」雄介が照れながら言う。

「あ、口すべっちゃったw」

「これもみんな宗則さんの協力のおかげなんだ。お金は全て立て替えてもらってるからね。一生かかっても返すよ。」

そばに付き添っている救急隊員が言った。

「君は本当は点滴や手当てをしなきゃならないんだ。あまりしゃべらないで大人しくしてなさい。」

「はい・・・すみません。」

「全く・・・こんなケース初めてだ。」

PM 2..30

二組の合同結婚式は、終始最高潮を保ち続けながら終了した。少ない人数でありながら、まるで500人分もいるかのような歓

声と祝福で盛り上がったのだった。

「雄介さん。」

「ん？なに？」

「どうして今日の日にかわったの？」

「ああ、それはね。」

「うん。」

「僕と恵美が初めて出会った日だからさ。」

「あ・あのときの・・・」

「うん。君が電車の中で僕のシャツに口紅をつけた日。」

→第1話参照

「あのときは・・・すごく恥ずかしかったわ。」

「でもそのお陰で恵美に出会えた。」

「そうね。。長かったわねここまで。。」

「うん・・・でもこの長かった期間以上に、これから恵美と一緒にいるよ。ずっとね。」

「ええ。」

「恵美・・・愛してる。」

「言葉で言ってくれたの初めてね。。嬉しい。」

恵美の目にうつすらと涙が光る。

「どうしても言えなかった・・・」

「あたしも愛してるわ。雄介さん。」

やっとふたりに安穩とした日々が巡ってきていた。

(完)

エピローグ（後書き）

最後まで読んでいただきありがとうございました。
ほんの一言でも感想をいただけたら嬉しく思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0224c/>

ネガティブな恋

2010年10月9日16時39分発行